

本城遺跡

箕輪町社会教育施設（町文化センター）建設
事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1997年

長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

本城遺跡

箕輪町社会教育施設（町文化センター）建設
事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1997年

長野県上伊那郡箕輪町教育委員会



調査地鳥観



溝状灌構

序

箕輪町は、伊那谷の北部、歴史の古い落原の里にあり、東西にそびえる山脈と、天竜川や山から流れる中小河川、そして河岸段丘に代表される複雑な地形とが織りなす、水と緑の自然あふれる美しい郷土であります。遙か先史の頃より、河川を中心とした水辺に人々が暮らし始め、彼ら先人達の日々の努力の積み重ねによって、今日の箕輪町へと発展してきました。その証として、私たちの町には、輝かしい文化と歴史を今に伝える多くの文化財があります。その多くは、日頃私たちの目に触れる事の少ない、遺跡、古墳などの埋蔵文化財であります。

今回の調査は、箕輪町文化センターを含む、町社会教育施設建設事業に先立ち、町教育委員会が平成5、6、8年の3ヶ年に渡って実施した、本城遺跡の緊急発掘調査であり、学術的に貴重な資料を収めることができました。

詳細な内容につきましては、本書の中で詳細に記しております。多くの皆様に広く活用され、郷土の歴史解明の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、本事業の遂行にあたり、深いご理解とご協力をいただきました、松島区並びに地域住民の皆様、そして調査関係者の皆様方に、本書の刊行をもちまして心から感謝申し上げます。

箕輪町教育委員会

教育長 藤沢 健太郎

例　　言

1. 本書は、平成5～8年度に渡り、長野県上伊那郡箕輪町中箕輪10,276番地3他に所在する本城遺跡の、緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は、箕輪町教育委員会が行ったものである。
3. 本書を作成するにあたり、作業分担を以下のとおり行った。

遺物の洗浄・注記—井上武雄、百瀬美晴、大串久子、後藤主計、小松峰人、西出あゆみ、
穂谷明子

遺物の接合・復元—福沢幸一

遺構図の整理・トレース—赤松 茂、池上賢司、大串久子、根橋とし子、宮脇陽子

遺物の実測・トレース—赤松 茂、百瀬美晴、大串久子、垣内美保、根橋とし子、宮脇陽子、百瀬千里

挿図作成—赤松 茂、根橋とし子、百瀬美晴、大串久子、根橋陽一、百瀬千里

写真撮影・図版作成—赤松 茂、池上賢司、片山 徹、後藤主計、小松峰人
4. 本書の執筆は、赤松 茂、根橋とし子、宮脇陽子が行った。
5. 本書の編集は、赤松 茂、池上賢司、井上武雄、百瀬美晴、大串久子、垣内美穂、片山 徹、後藤主計、小松峰人、根橋とし子、根橋陽一、樋口彦雄、穂谷明子、福沢幸一、宮脇陽子、百瀬千里が行った。
6. 出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会が保管している。広く活用されたい。
7. 本調査及び本書の作成にあたり、各機関並びに個人の方々にご指導ご協力をいただいた。
記して感謝申し上げる。

機関—松島区、辰野町教育委員会、南箕輪村教育委員会、(財)長野県埋蔵文化財センター
個人—赤羽義洋、小平和夫、友松 諭、福島 永

凡 例

1. 遺構実測図は、次の縮尺に統一した。

住居址 1 : 60 (カマド・遺物出土状況 1 : 40)、掘立柱建物址 1 : 40、

溝状遺構 1 : 120 (土層断面 1 : 100・120)、堅穴状遺構 1 : 60、

土坑 1 : 40、ピット 1 : 40

2. 遺物実測図・拓影図は、次の縮尺に統一した。

土器実測図 1 : 4、石器実測図 1 : 3、土器拓影図 1 : 3、鐵器実測図 1 : 2

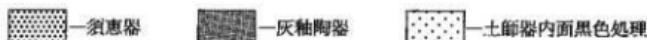
3. 土層及び土器の色調は、「新版 標準土色帖」を用いて記してある。

4. 土器の接合状況は、観察できるもののみ断面に表示してある。

5. 遺構実測図中におけるスクリーントーンの表示は、次のものを表す。



6. 土器実測図中におけるスクリーントーンの表示は、次のものを表す。



7. 土坑及びピットの一覧表の法量は、上から長径・短径・深さの順に記し、単位はcmである。また、現存する数値は()で、一は計測不能を表している。
8. 出土土器観察表の法量は、上から口径・底径・器高の順に記し、単位はcmである。また、実数は計測可能なものを表す。口径・底径で推測される数値は()で、器高で現存する数値は()で、一は計測不能を表している。
9. 出土石器観察表の法量は、上から長さ・幅・厚さの順に記し、単位はcmである。重さの単位はgで表している。共に、現存する数値は()で、一は計測不能を表している。
10. 出土鐵器観察表の法量は、上から長さ・幅・厚さの順に記し、単位はcmである。重さの単位はgで表している。共に、現存する数値は()で、一は計測不能を表している。

本文目次

序、例 言・凡 例

第Ⅰ章 発掘調査の概要	1
第1節 調査の経過	1
第2節 調査概要	2
第3節 調査日誌	4
第Ⅱ章 遺跡の環境	8
第1節 自然環境	8
第2節 歴史環境	9
第Ⅲ章 調査の結果	11
第1節 調査方法と結果概要	11
第2節 土層堆積状況	12
第Ⅳ章 遺構と遺物	17
第1節 住居址	17
第2節 堀立柱建物址	45
第3節 土坑	45
第4節 竪穴状遺構	49
第5節 ピット	51
第6節 溝状遺構	55
第7節 遺構外出土遺物	58
第Ⅴ章 まとめ	59

報告書抄録

図版

挿 図 目 次

第1図 位置図.....	1	第23図 8号住居址実測図.....	37
第2図 周辺遺跡分布図.....	10	第24図 8号住居址出土土器実測図.....	38
第3図 調査区設定図.....	11	第25図 9号住居址実測図.....	40
第4図 土層断面図.....	12	第26図 9号住居址出土土器実測図.....	41
第5図 全体図	13・14	第27図 10号住居址実測図.....	42
第6図 全体図(別図)	15・16	第28図 10号住居址出土土器実測図・拓影図	
第7図 1号住居址実測図.....	17	43
第8図 2号住居址実測図.....	18	第29図 11号住居址実測図.....	44
第9図 2号住居址出土土器実測図.....	19	第30図 11号住居址出土土器実測図.....	44
第10図 3号住居址出土カマド実測図.....	20	第31図 1号掘立柱建物址実測図.....	45
第11図 3号住居址実測図.....	21	第32図 土坑実測図1	46
第12図 3号住居址出土土器実測図.....	22	第33図 土坑実測図2	47
第13図 4号住居址実測図.....	24	第34図 1号竪穴状遺構実測図.....	50
第14図 4号住居址出土土器実測図.....	25	第35図 10号ピット出土土器拓影図	51
第15図 4号住居址出土鉄器実測図.....	25	第36図 ピット実測図	51
第16図 5号住居址実測図.....	26	第37図 溝状遺構実測図	53・54
第17図 5号住居址出土土器実測図.....	27	第38図 溝状遺構出土遺物・拓影図	55
第18図 6号住居址実測図	29	第39図 溝状遺構土層断面図1	56
第19図 6号住居址出土土器実測図	30	第40図 溝状遺構土層断面図2	57
第20図 7号住居址実測図	31・32	第41図 遺構外出土土器実測図	58
第21図 7号住居址出土土器実測図	34	第42図 遺構外出土土器拓影図	58
第22図 7号住居址出土鉄器実測図	36		

表 目 次

第1表 周辺遺跡分布一覧表	9
第2表 2号住居址出土土器観察表	19
第3表 3号住居址出土土器観察表	23
第4表 4号住居址出土土器観察表	25
第5表 4号住居址出土鉄器観察表	25
第6表 5号住居址出土七器観察表	28
第7表 6号住居址出土土器観察表	30
第8表 7号住居址出土土器観察表	35
第9表 7号住居址出土鉄器観察表	36
第10表 8号住居址出土土器観察表	39
第11表 9号住居址出土土器観察表	41
第12表 10号住居址出土土器観察表	43
第13表 11号住居址出土土器観察表	45
第14表 土坑一覧表	48
第15表 ピット一覧表	52
第16表 溝状造構出土鉄器観察表	55
第17表 遺溝外出土土器観察表	58

図版目次

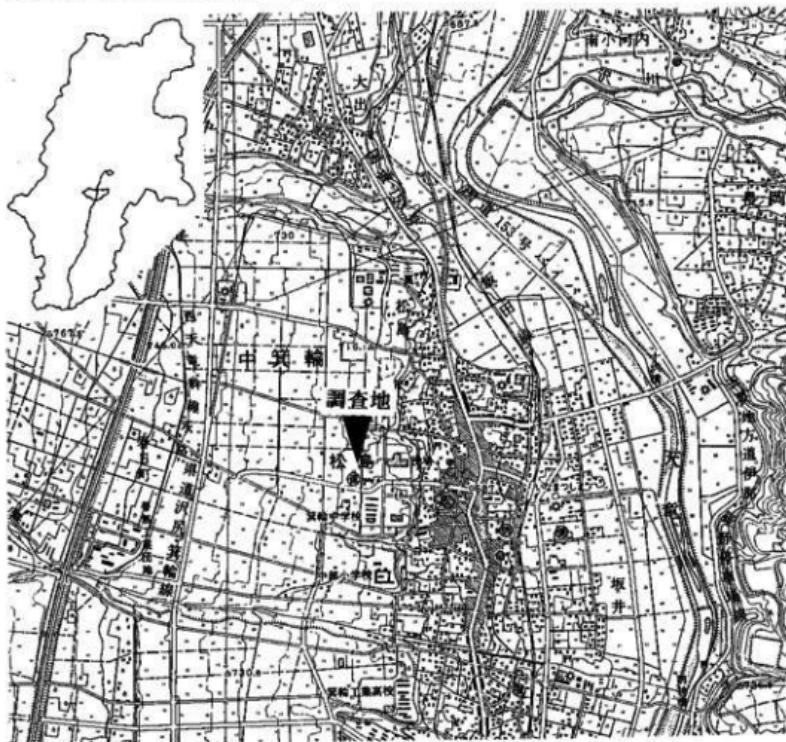
巻頭カラー図版 調査地鳥観、溝状遺構

- 図版1 調査地全景（調査前、東方より）、調査地近景1（北東より）
- 図版2 調査地近景2（西方より）、土削堆積状況
- 図版3 1号住居址、2号住居址
- 図版4 3号住居址、3号住居址カマド出土状況、3号住居址遺物出土状況
- 図版5 4号住居址、5号住居址
- 図版6 6号住居址1、6号住居址2
- 図版7 7号住居址、7号住居址カマド出土状況、7号住居址横穴出土状況
- 図版8 8号住居址、9号住居址
- 図版9 10号住居址、10号住居址カマド出土状況
- 図版10 11号住居址、1号掘立柱建物址
- 図版11 1号土坑、2号土坑、4号土坑
- 図版12 7号土坑、8号土坑、10号土坑
- 図版13 11号土坑、16号土坑、11号ピット
- 図版14 1号竪穴状遺構、1・2号溝状遺構
- 図版15 1号溝状遺構、1号溝状遺構土削堆積状況
- 図版16 2号溝状遺構土削堆積状況、2号溝状遺構
- 図版17 溝状遺構調査前、溝状遺構調査状況
- 図版18 出土土器1
- 図版19 出土土器2
- 図版20 出土土器3
- 図版21 出土土器4
- 図版22 出土土器5
- 図版23 出土土器6
- 図版24 出土鉄器、出土石器1
- 図版25 出土石器2、調査協力者（平成5年度）

第Ⅰ章 発掘調査の概要

第1節 調査の経過

本城遺跡は、天竜川右岸に連なる河岸段丘の、突端部にみられる遺跡群に属し、現在箕輪町役場を中心とした一帯に広がり、当地は室町時代後期の武将である松島氏の居城跡として広く知られている。既に役場がここに移転する以前に、西天竜幹線水路の開設に伴う土地改良事業によって、かつてとどめていたと思われる城跡の状況は失われてはいる。しかし役場の敷地周辺には、堀割り等の城館遺構の一部を現在確認することができる。



第1図 位置図 (1 : 25,000)

町教育委員会は、老朽化した町公民館の移転新築計画（町社会教育施設建設事業）に先立ち、役場西側の耕作地7,058m²の建設用地を対象とした、同遺跡が包蔵される埋蔵文化財の発掘調査に着手し、記録保存を行う運びとなった。

調査は、用地の確保ができた箇所から、平成5～8年度の4ヶ年に渡って実施し、随時年度ごとの整理作業を行ってきた。そして、平成9年3月31日を持って報告書の刊行に至った。

第2節 調査概要

1 遺 踪 名 本城遺跡

2 所 在 地 長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,276番地3他

3 事 業 期 間

平成5年度 5年4月2日～6年1月20日（調査）、5年8月26日～6年3月31日（整理）

平成6年度 6年4月1日～6月20日（調査）、6年6月21日～7年3月28日（整理）

平成7年度 7年10月6日～8年2月3日（整理）

平成8年度 8年4月1日～5月31日（調査）、8年6月22日～9年3月31日（整理）

4 事 務 局 教育長 堀口 泉（平成8年12月離任）

教育長 藤沢 健太郎（平成8年12月就任）

副 参 事 柴 登巳夫（箕輪町郷土博物館館長）

副 主 幹 青木 正（平成6年3月離任）

副 主 幹 赤松 茂（同館学芸員）

主 査 柴 秀毅（同館学芸員—平成7年4月着任）

臨時職員 酒井 純子、根橋 とし子、宮脇 陽子（5、6年）、

穂谷 明子（7、8年）

5 調 査 団

平成5年度

團 長 堀口 彦雄

担 当 者 柴 登巳夫

調査主任 赤松 茂

調査員 根橋 とし子、福沢 幸一、宮脇 陽子

調査団員 井上 武雄、遠藤 茂、大槻 茂範、大槻 泰人、岡 章、岡 正、
春日 義人、唐沢 光國、倉田 千明、小池 久人、小嶋 久雄、
後藤 主計、笹川 正秋、戸田 隆志、西出 あゆみ、根橋 由紀、
野村 金吉、伯耆原 正、堀 五百治、堀 美人、松田 貫一、松田 幸雄、
水田 重雄、向山 幸次郎、百瀬 千里、百瀬 美晴、矢島 祥亮、
山口 昭平、山田 武志

平成 6 年度

團 長 樋口 彦雄

担当者 柴 登巳夫

調査主任 赤松 茂

調査員 根橋 とし子、福沢 幸一、宮脇 陽子

調査団員 池上 賢司、井上 武雄、大串 久子、大槻 茂範、大槻 泰人、
春日 義人、倉田 千明、小池 久人、小嶋 久雄、小松 美奈子、
小松 峰人、後藤 主計、笹川 正秋、戸田 隆志、野村 金吉、
伯耆原 正、堀 五百治、堀 美人、堀内 昭三、Michaei. Wittmer、
松田 貫一、水田 重雄、向山 幸次郎、百瀬 千里、百瀬 美晴、
山口 昭平、山田 武志

平成 7 年度

調査主任 赤松 茂

調査員 池上 賢司、根橋 とし子

作業員 大串 久子、穂谷 明子

平成 8 年度

團 長 堀口 泉、藤沢 健太郎

副團長 柴 登巳夫

担当者 赤松 茂

調査員 池上 賢司、根橋 とし子、福沢 幸一

調査団員 井沢 和幸、泉沢 徳三郎、井上 武雄、遠藤 茂、大槻 茂範、
大槻 泰人、堀内 美穂、春日 英美、片桐 勇、片山 徹、倉田 千明、
桑原 篤、後藤 主計、小松 峰人、笹川 正秋、白鳥 紀子、戸田 隆志、
根橋 陽一、藤沢 具明、伯耆原 正、穂谷 明子、堀 五百治、
松田 貫一、水田 重雄、向山 幸次郎、山口 昭平、山田 武志

第3節 調査日誌

平成5年度

4月2日（金）～6日（火） 調査準備。

4月7日（水） 調査予定範囲の南側調査区から作業を開始する。設定したトレンチを、大



型バックホーにて掘削する。住居址等の遺構が検出したため、その確認面までの表土除去作業を継続して進める。

4月8日（木） 終日、表土除去作業。現場事務所の設置、及び機材の搬入を行った。

4月9日（金） 終日、表土除去作業。

4月12日（月） 調査団の結団式を

行う。終日、遺構上面確認作業を行う。

4月13日（火）～15日（木） 終日、遺構上面確認作業を行う。

4月16日（金） 遺構上面確認作業がほぼ終了し、8軒の住居址と土坑及びピット等の遺構が検出した。検出した住居址の掘り下げを開始する。

4月19日（月）～各遺構の掘り下げを順に進める。遺構は、土層堆積状況の写真撮影及び実測による記録作業、遺構平面の写真撮影及び実測による記録作業、出土した遺物の取り上げ、等の手順で作業を進める。

4月30日（金） 算輪町教育委員の方々が観察にみえる。

5月6日（木） 各遺構の掘り及び記録作業を継続する。長野日報が取材に訪れる。



5月7日（金） 各遺構の掘り及び記録作業を継続する。本日より、北側調査区の試掘及び遺構上面確認作業を始める。みのわ新聞が取材に訪れる。

5月11日（火） 各遺構の掘り及び記録作業、遺構上面確認作業を継続する。算輪中部小学校5・6年生が見学に来る。みのわ新聞・中日新聞・算輪毎日新聞が取材に訪れる。

- 5月12日（水） 各遺構の掘り及び記録作業、遺構上面確認作業を継続する。
- 5月13日（木） 北側調査区から、松島城址の堀跡らしき様相が現れ始める。
- 5月14日（金） 雨天のため室内作業。
- 5月17日（月） 各遺構の掘り及び記録作業を継続する。
- 5月18日（火） 雨天のため室内作業。
- 5月19日（水） 各遺構の掘り及び記録作業を継続する。博物館協議会の各委員が視察にみえる。
- 5月20日（木） 各遺構の掘り及び記録作業を継続する。
- 5月21日（金） 南側調査区の全体写真を撮影する。
- 5月24日（月）～6月9日（水） 各遺構の掘り及び記録作業を継続する。
- 6月10日（木） 北側調査区の作業が本日にて終了する。北側調査区の排土作業を大型バックホーで開始する。
- 6月11日（金） 終日、排土作業。
- 6月14日（月） 雨天のため室内作業。
- 6月15日（火） 雨天のため室内作業。
- 6月16日（水） 北側調査区の作業を、本格的に開始する。
- 6月17日（木）～22日（火） 堀状遺構内の堆積土の排出作業を行う。
- 6月23日（水） 雨天のため室内作業。
- 6月24日（木）～7月8日（木） 溝状遺構内の堆積土の排出作業、及び記録作業を行う。
- 7月9日（金） 溝状遺構の、全体写真を撮影する。
- 7月15日（木） 機材の撤収を行い、用地取得箇所の調査を終了する。



平成6年度

- 4月1日（金）～20日（水） 調査準備、及び整理作業。
- 4月21日（木） 本日より第2次調査を開始する。大型バックホーにて設定レンチの掘削を行う。
- 4月22日（金）～26日（火） 終日レンチの掘削、及び表土除去作業。
- 5月12日（金）～18日（水） 溝状遺構の上面確認作業、及びレンチの壁削り作業を行う。



溝状遺構の掘り下げを連日行う。

6月6日（月）～8日（水） 溝状遺構及びトレンチの記録作業を連日行う。

6月14日（火） 大型バックホーにて埋め戻しを行う。

6月20日（月） 機材の撤収を行い、調査を終了する。

平成7年度

9月6日（水）～2月3日（土） 室内にて整理作業を行う。

平成8年度

4月1日（火）～4日（金） 調査準備。

4月7日（月）・8日（火） 大型バックホーにて表土除去作業を行う。

4月9日（水） 改めて発掘調査団の結団式を行い、調査を開始する。終日、遺構上面確認作業を行う。

4月10日（木）～12日（金） 遺構上面確認作業、及びサブトレンチの掘削作業を行い、検出した土坑の半掘を始める。



5月19日（木） 検出遺構の記録作業を行う。

5月20日（金）～23日（月） 再度、大型バックホーにより溝状遺構の表土除去作業を行う。

5月25日（水）26日（木） 溝状遺構の掘り下げ、及び土層断面測量作業を行う。

5月27日（金）～6月3日（金）

溝状遺構の掘り下げを連日行う。

6月6日（月）～8日（水） 溝状遺構及びトレンチの記録作業を連日行う。

6月14日（火）

大型バックホーにて埋め戻しを行う。

6月20日（月）

機材の撤収を行い、調査を終了する。

4月15日（月） 検出住居址の掘り下げを行う。

4月16日（火） 雨天のため室内作業。

4月17日（水）～30日（火） 各遺構の掘り及び記録作業を行う。

5月1日（水） 雨天のため室内作業。

5月2日（木） 遺構全体写真撮影、

及び全体測量作業を行う。

5月3日（金） 遺構全体測量作業、及び一部機材の撤去を行う。

5月13日（月） 各遺構の測量作業、及び写真撮影を行う。

5月14日（火） 各遺構の測量作業、及び写真撮影を行う。終了箇所から埋め戻しに入る。

5月15日（木） 埋め戻しが完了する。

5月31日（金） すべての機材を撤去し、本日にて調査が完了した。

第II章 遺跡の環境

第1節 自然環境

箕輪町は、西は木曾山脈、東は赤石山脈に囲まれた伊那盆地の北方にあり、諏訪湖を源とする天竜川が、町のほぼ中央を東西に二分するように南流している。天竜川西岸に発達した広大な扇状地は、木曾山系の山々から天竜川に流れ込む中小河川によって形成された複合扇状地である。北から、北の沢川、桑沢川、深沢川、帶無川、大泉川、小沢川と続き、南ほど流路が長くなっている。それは、西側の山々が北から南にかけて高さを増しているためで、その流路に比例して山麓に形成される扇状地の規模も大きくなっている。扇状地における地質構造は、ローム層とその下の砂岩・粘板岩を主とする円礫層・砂の層で構成されている。天竜川はその末端部を南流し、流路に沿って河岸段丘を作り上げている。段丘の突端部は、天竜川や中小河川の氾濫による水害を受けにくい東側に面する緩やかな傾斜地である。段丘下には、扇頂部や扇尖部より地下に浸透した地下水が伏流水となって天竜礫層と沖積層の境に湧き出る湧水が多く、扇状地を流れる小河川の水利と合わせ、豊かな水源に恵まれている。また、段丘崖下には、天竜川による広大な氾濫原を見ることができる。



上空より遺跡を望む

第2節 歴史環境

箕輪町は、天竜川を挟んで典型的な河岸段丘と扇状地で形成された地形で、湧水にも恵まれ先史より人が居住し易い好的な場所といえる。町内にはそんな原始・古代人たちが残した足跡ともいうべき多くの遺跡が散在し、現在のところ包蔵地176箇所、古墳24基が確認され、上伊那郡内においても屈指の遺跡地帯として知られている。

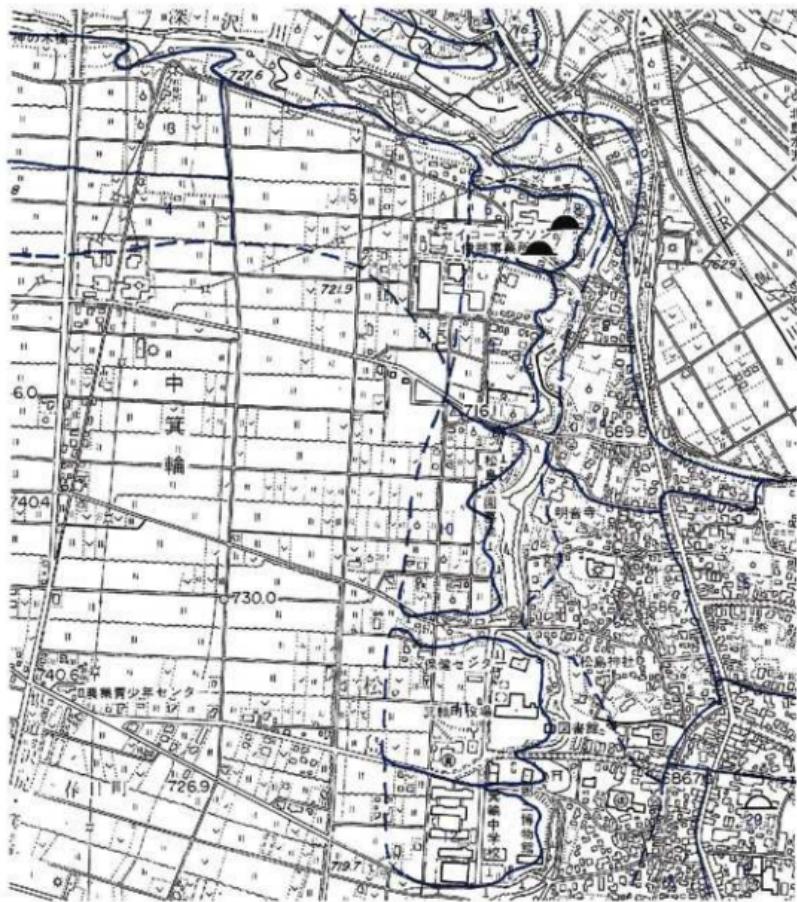
その多くは河岸段丘上及び扇状地に立地しており、天竜川右岸の遺跡の分布状況は、2から3段になる河岸段丘の突端部にみられる遺跡（1、6～19）と、深沢川や桑沢川などの天竜川

表1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	地籍	立地	時代					備考
				旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	
1	大出城	大出	段丘突端					○	
2	大出南	大出	扇 夾	○			○		
3	當 地	松島	扇 夾	○	○		○		調査-昭和48年度県教委、62・平成5年度
4	大道上	松島	扇 夾	○			○		調査-平成6～8年度
5	久保林	松島	扇 夾				○		
6	王 墓	松島	段丘突端	○		○			
7	松島王墓1号	松島	段丘突端				○		県史跡
8	松島王墓2号	松島	段丘突端				○		県史跡
9	王墓付近	松島	段丘突端	○			○		
10	臼杵洞	松島	段丘突端	○		○	○		
11	本 城	松島	段丘突端	○	○	○	○	○	伝松島氏城跡含む 調査-平成5・6・8年度
12	中 山	松島	段丘突端	○			○		調査-昭和59・61・62年度
13	王 墓 北	松島	段丘突端	○					
14	北 町	松島	段丘突端	○	○	○	○		
15	神社付近	松島	平 地	○	○		○		
16	東 町	松島	段丘突端	○	○	○	○	○	調査-昭和59・61・62年度
17	旭 町	松島	段丘突端	○	○	○	○		
18	通り町	松島	段丘突端				○		
19	仲 町	松島	段丘突端	○	○	○	○	○	調査-平成3・4・8年度
20	仲町古墳	松島	段丘突端				○		調査-平成3年度

に注ぐ小河川の両岸に所在する遺跡（2～5）、東西の山裾に広がる遺跡、の3類に大別することができる。本年までに行なわれた発掘例を中心に前者について概観してみると、縄文・弥生・奈良・平安の各時代の集落址、及び墓域を中心とした生活の痕跡、更に段丘崖下の箕輪遺跡に代表される生産遺跡も確認されている。

今後、これらの遺跡を保護していく上でも、この一帯における開発には、充分な注意を図っていく必要があるといえる。



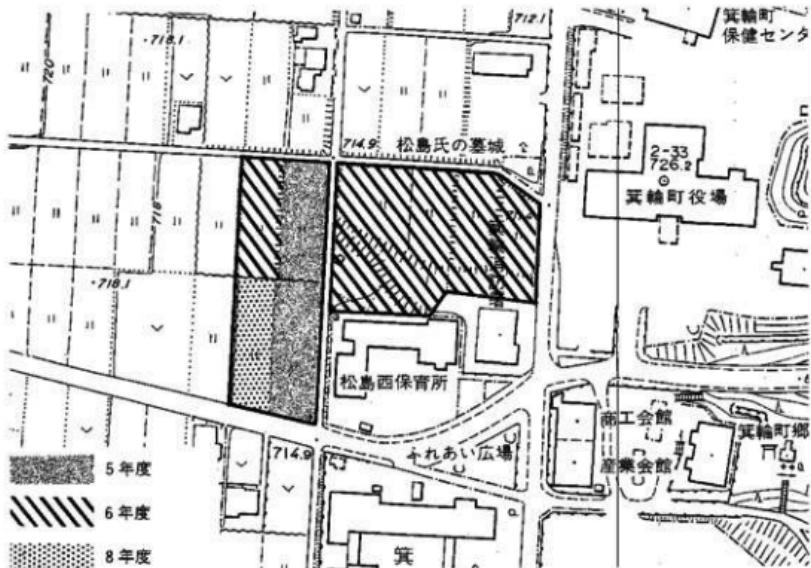
第2図 周辺遺跡分布図

第III章 調査の結果

第1節 調査方法と結果概要

今回の調査地は、昭和52年に町史跡に指定された「松島氏の墓域」の南西に広がる、水田を中心とした耕作地を建設用地とした、およそ9,000m²が調査対象であった。そのうち、用地の取得ないし借用が行えた箇所から、平成5年度が2,150m²、6年度が5,850m²、8年度が1,000m²で各面積の発掘調査を実施した。

事業初年度（平成5年）の調査は、現地形の起伏状況から、包含される遺構・遺物の相違を予測した上で、集落遺構の検出が見込まれる南西側の平地には大型バックホーでのトレンチ掘りで、城址に係わる堀状遺構の検出が見込まれる北西側の窪地には手掘りによる試掘調査を行った。その結果に基づき、遺構が検出する直上層までの表土をバックホーで除去した。次に、人力での遺構上面確認作業→各遺構の掘り上げ→遺構の土層堆積状況の測量・写真撮影→遺構の完掘→写真撮影→平面測量・遺物の取り上げ→全体写真撮影→全体測量・基本土層測量、を



第3図 調査区設定図 (1:2,500)

およその手順として進めた。尚、次年度以降についても、この結果と作業手順をベースとし、調査を進めた。

構造は、住居址・土坑など、各種別ごとに検出順で番号を付けた。調査時のグリッドは、建設事業の際に周辺道路に測量した基準ポイントを、新たに国家座標と標高を補足測量してもらい、それを活用して設定した。そして調査後に、主軸を南北方向とするため、X-Y軸に修正を加え10m四方のグリッドに変更し、南北方向をローマ数字で、東西方向をアルファベットを用いて呼称した。記録作業における標高の割り出しも、各調査区ごとに近接する基準ポイントから移動し、設定した。

検出遺構は以下のとおりである。

- ・ 穴式住居址—11軒（古墳、奈良、平安時代）
- ・ 溝状遺構—2条（中世）
- ・ 土坑—15基（縄文時代、時期不明）
- ・ 穴状遺構—1基（時期不明）
- ・ ピッカート—16基（時期不明）

第2節 土層堆積状況

天竜川西岸の扇状地上における地質構造は、耕作土等黒褐色腐食土層→火山灰土層（テフラ層）→砂岩・粘板岩を主とする砂礫層という堆積状況が普遍的にみられる。遺構の検出は、主に耕作土下の自然堆積黒褐色土、もしくはテフラの漸移層が一般的で、土地改良等による地形の削平により、テフラ確認面が遺構検出面である場合も少なくない。また多くの遺構は、テフラ層内にまで掘り込むものが多く、中には砂礫層にまで及ぶものも見られる。

I層—黒褐色土（5YR3/1）水田耕耘及び土手等の表土。

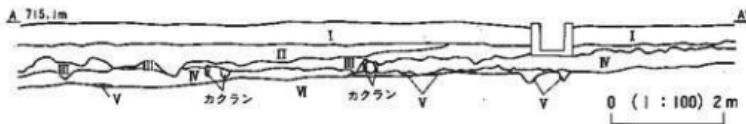
II層—暗赤褐色土（5YR3/4）開田工事に搬入されたと思われる、人為的な堆積土。

III層—暗赤褐色土（5YR3/2）

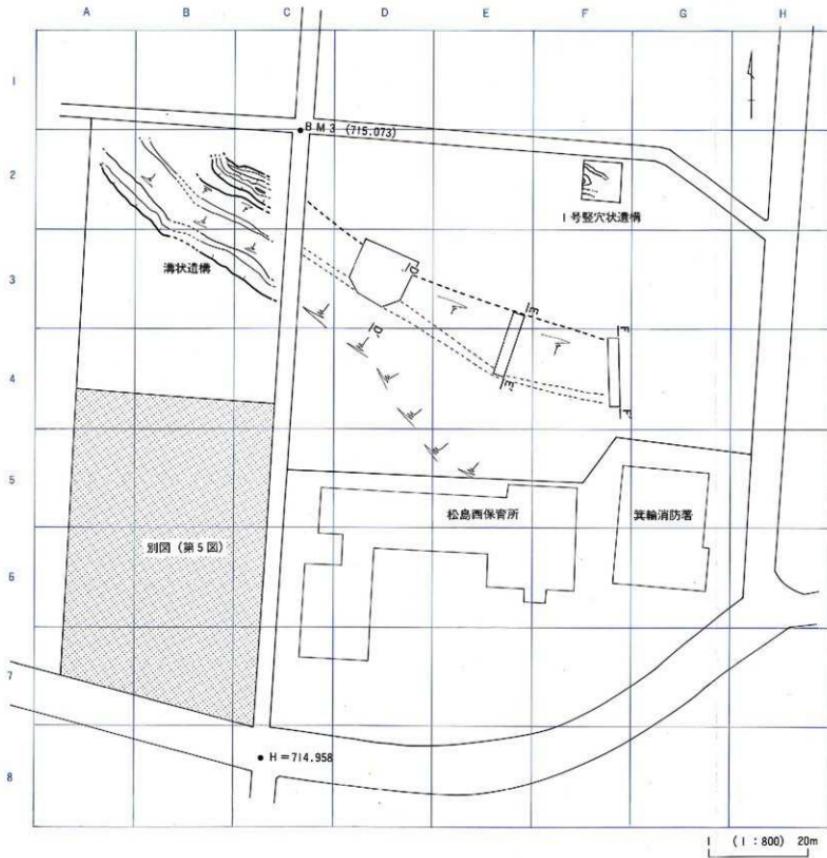
IV層—暗赤褐色土（5YR3/3）暗赤褐色土（5YR3/6）を10%含む。本層直下が遺構確認面である。

V層—黒褐色土（5YR3/2）黄褐色土（10YR5/8）を10%含む。本層確認面が遺構確認面である。

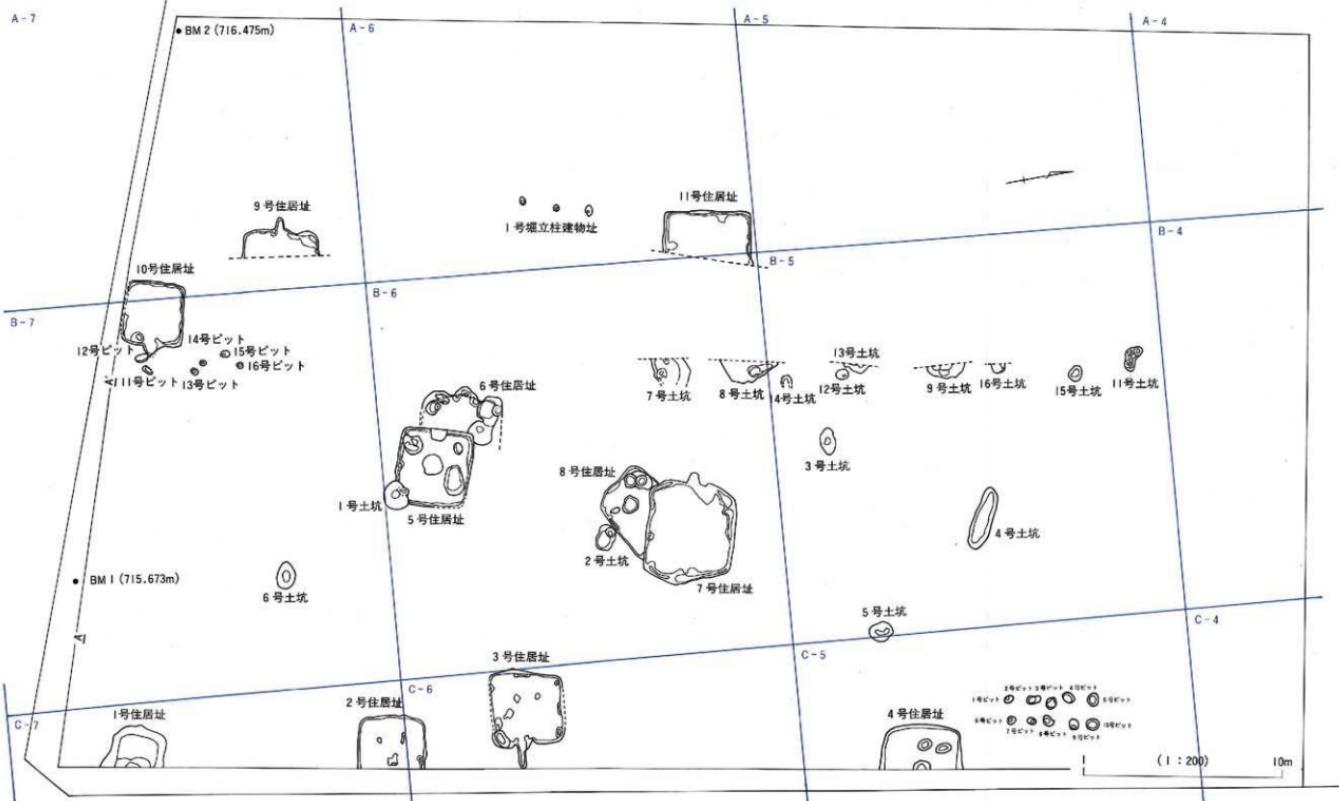
VI層—黄褐色土（10YR5/8）一般的に本地域では、ローム層または赤土と呼ばれる火山灰土層（テフラ）。削平の進む箇所では、本層確認面が遺構確認面である。



第4図 土層断面図



第5図 全体図



第6図 全体図(別図)

第IV章 遺構と遺物

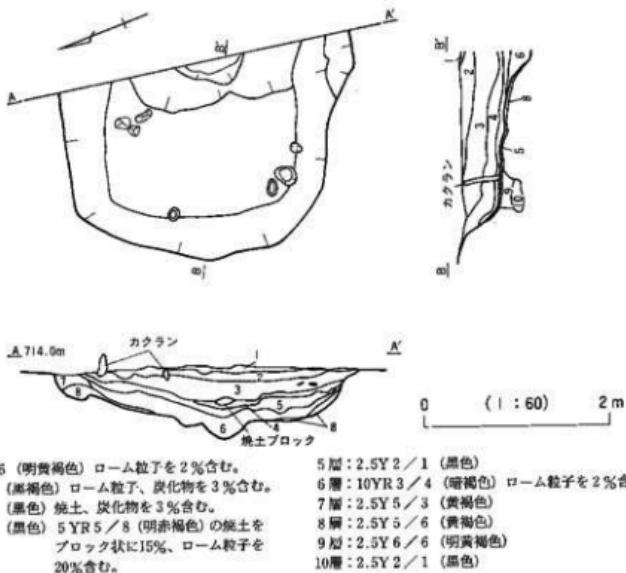
第1節 住居址

1号住居址

遺構（第7図）調査区の南部、C-7グリッドに位置する。検出箇所が調査予定範囲の境界線上に位置するため、 $3.0 \times (2.1)$ mのみの確認で、遺構の規模は不明である。しかし、遺構のコーナー部と思われる状況はあまり屈曲がなく、緩やかなカーブを描くことから、円形ないし稍円形に近い隅丸方形を呈するプラン形状を推察する。

床は全体的に堅く締まっていたが、平坦でなく凹凸が目立ち、掘削限界部では土坑状の段部を確認した。基本的に地山のテフラを叩き締めてあるが、部分的に同質の土を用い、5~10cmの厚さで床の造作を行ったと考えられる箇所もあった。

壁残高は30~40cmを測るが、床から緩やかな傾斜を持って壁が立ち上がり、床とプランとの面積の格差がみられた。また、柱穴及び窓溝はなく、カマド等の火焼状況も本調査範囲からは



第7図 1号住居址実測図

検出していない。尚、覆土は10分層された。

遺物 須恵器は壺、土師器は壺が出土している。何れも國化不能な小破片のみで、出土量も少なく、覆土中からの出土であった。これらの諸特徴から、本址は、古墳時代後期に時期判定を考える

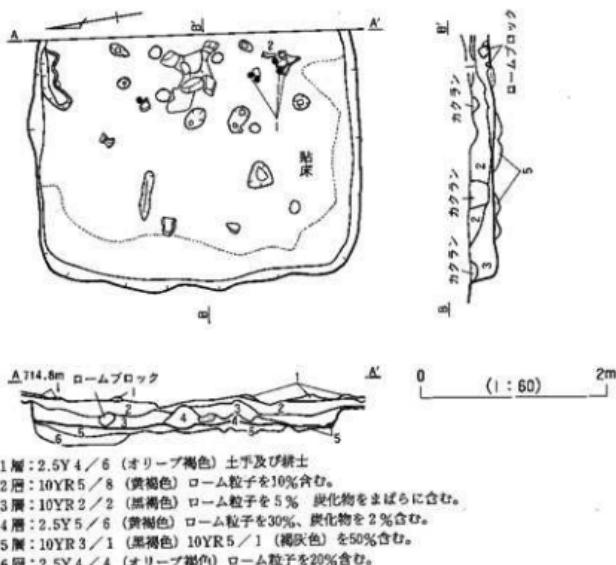
本址は、上記の諸特徴を考慮し、從来より住居址としての捉え方を行ってきたが、後述する他の住居址との比較から、かなり特異的な状況を示す一例と言える。しかし、本遺構の不完全な検出状態からは、別の遺構としての要素も乏しい。

2号住居址

遺構（第8図）調査区の南部、C-6、C-7グリッドに位置する。主軸はN-98°-Eを指し、(2.7) × 3.5mの検出規模で、方形を呈するプラン形状で、遺構全体規模の約70%の確認であった。更に部分的ではあったが、遺構内部が擾乱を受けていた。

床は、壁下周辺を除き、ほぼ2~5cm程度の厚さで、黒褐色の粘土による貼り床がなされ、平坦でかなり堅固であった。

壁残高は、15~21cmを測り、プランから床まではほぼ垂直に落ち込む。また、周溝及び柱穴に



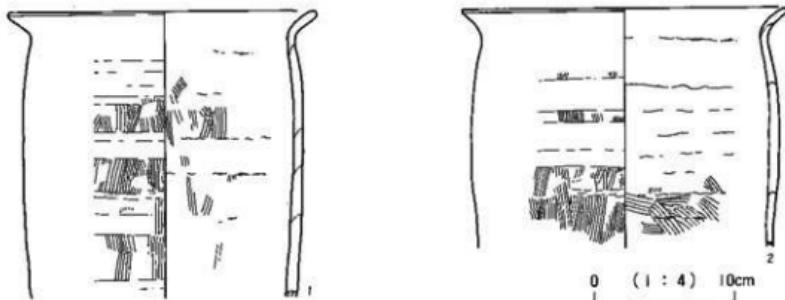
第8図 2号住居址実測図

相当するピットは、検出できなかった。

カマドは、調査限界付近ほぼ中央の床面直上からその残骸と思われる、火焼状況を示す人頭大の転石が数個と、黄褐色の粘土が出土したことから、調査区外にその存在を推察する。尚、覆土は4分層され、貼床及び床下は2分層された。

遺物（第9図）須恵器は壺、甕、壺が、土師器は内面黒色処理の壺、同じく内面黒色処理の高壺、長胴甕（1・2）、ロクロ成形甕が床面直上から出土している。須恵器の甕は、厚さや表面に残る叩き目から灰白色で軟質の焼成不良の大型の甕の一部と推察され、5号住居址出土のそれ（5）と、その諸特徴が類似する。また高壺も、3号住居址出土のそれとも類似性を感じられる。

これらの出土遺物の諸特徴から、本址は奈良時代末から平安時代初頭に時期判定を考える。



第9図 2号住居址出土土器実測図

第2表 2号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1	長胴甕	(21.6) — 20.2	口縁部は短く外反し、胴部は直線的に下降する。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ハケ後ヨコナデ 内面一口縁部ヨコナデ、胴部ハケ	内面炭化物付着。胎土に雲母、砂粒を含む。 10YR6/4(にぶい黄橙色)
2	長胴甕	(23.2) — (17.0)	口縁部は短く外反し、胴部は直線的に下降する。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ハケ、ヨコナデ 内面一口縁部ヨコナデ、胴部ハケ	両面炭化物付着。胎土に雲母、砂粒を含む。 10YR6/3(にぶい黄橙色)

3号住居址

造構（第10図）調査区の南側、C-6グリッドに位置する。4.0×3.7mの規模で、方形を呈するプラン形状である。カマドは東壁ほぼ中央に位置し、N-98°-Eに主軸を指す。

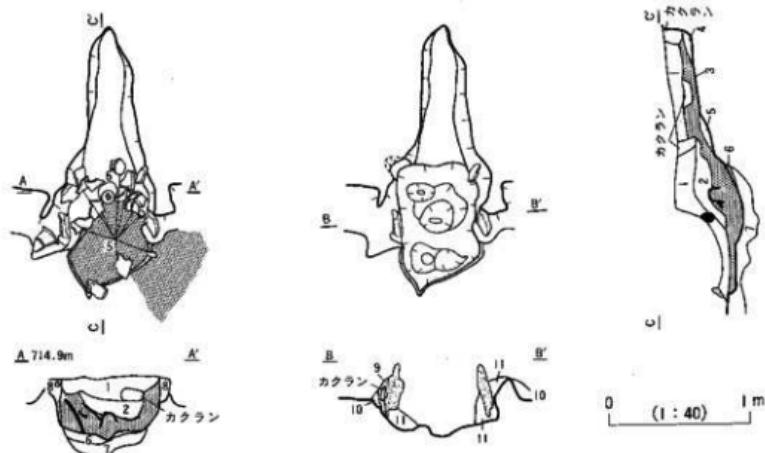
床の状態は、カマドの前方部から南壁にかけて僅かながら、貼り床された堅固な平坦部がみられるが、ほとんどが覆土と差のない軟弱な床であった。

覆土は7分層から構成されるが、北から南側壁にかけての中央部が擾乱を受け、その一部が床下まで及んでいた。全体的に炭化物が多く含まれ、その割合が下部に及ぶほど高くなり、床直上付近で部分的に形状の確認できる炭化木材が出土している。8層は貼床、9層は床下埋土と観察した。

壁残高は、30~36cmを測り、プランから床までほぼ垂直に落ち込むが、南北両壁の中央付近は擾乱されていた。周溝は、東壁を除く地下の中央に部分的に周溝らしき窪みを確認するのみである。

柱穴は、南東コーナーを除く、各コーナー下の床に円形ないし梢円形で、床から10~30cmの深さの窪みを検出したが、形状及び大きさや深さにはばらつきがあり、底面も軟弱であるため、柱穴としての確証は得られなかった。

また、南東コーナー下には、90×60cmの規模で深さが35cmの梢円形を呈する土坑状の落ち込みが検出された。更にそれと切り合う状態で、50×35cmで深さ15cmのピット状の落ち込みも検出した。両者からは、壺・甕・高台付壙などの遺物を包含し、焼土ブロック及び木片の炭化物

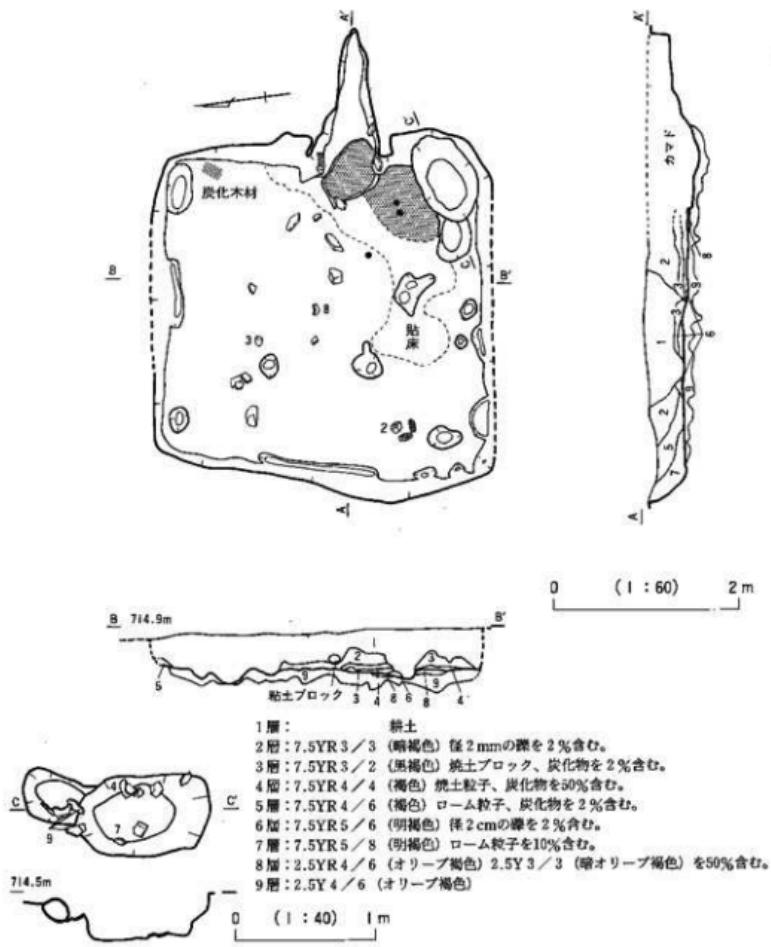


- 1層: 10YR 3/4 (暗褐色) 炭化物を2%、ローム粒子を5%含む。
 2層: 10YR 3/4 (暗褐色) ロームブロック、焼土ブロックを50%含む。
 3層: 2.5YR 4/8 (赤褐色) 焼土を50%以上含む。
 4層: 10YR 3/1 (黒褐色)
 5層: 10YR 5/6 (黒褐色)
 6層: 10YR 6/6 (明黄褐色) 10YR 2/1 (黒色) を20%含む。
 7層: 10YR 2/2 (黒褐色) ローム粒子を30%含む。
 8層: 2.5YR 5/8 (明赤褐色) 大焼を受けたカマドの貼り付けローム。
- 9層: 2.5Y 5/4 (黄褐色) カマド焼塗時の貼り付けローム。
 10層: 2.5Y 3/1 (黒褐色) 2.5Y 4/4 (オリーブ褐色) を30%含む。
 11層: 2.5Y 5/6 (黄褐色) 2.5Y 3/1 (黒褐色) を10%含む。

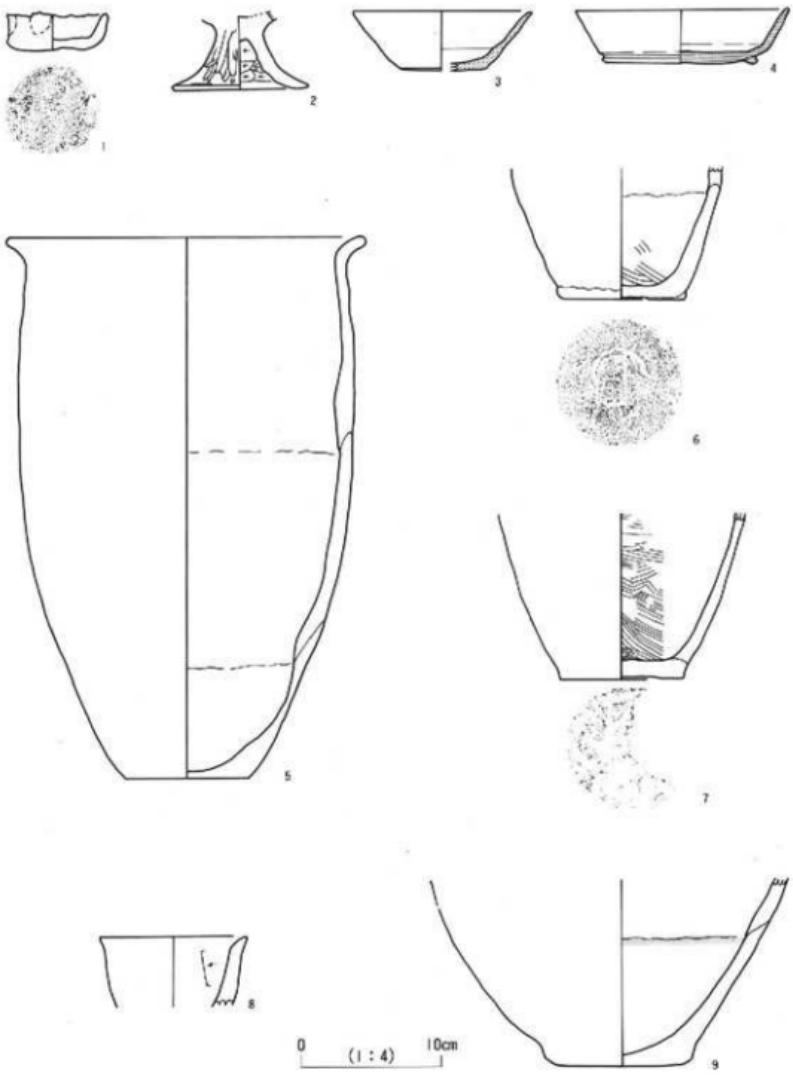
第10図 3号住居跡カマド実測図

を多く含んでいた。

カマドの特徴としては、他の住居址と比較し残存状態が良く、両袖部と火焼部そして煙道の破壊が少ない。袖部は縦長の石材を芯石としたロームを主体とする粘土で補強した構造で、天井部は崩落したものと思われるが、両袖の芯石は「ハ」の字状に傾いて立ち、その傾きとほぼ



第II図 3号住居址実測図



第12図 3号住居址出土土器実測図

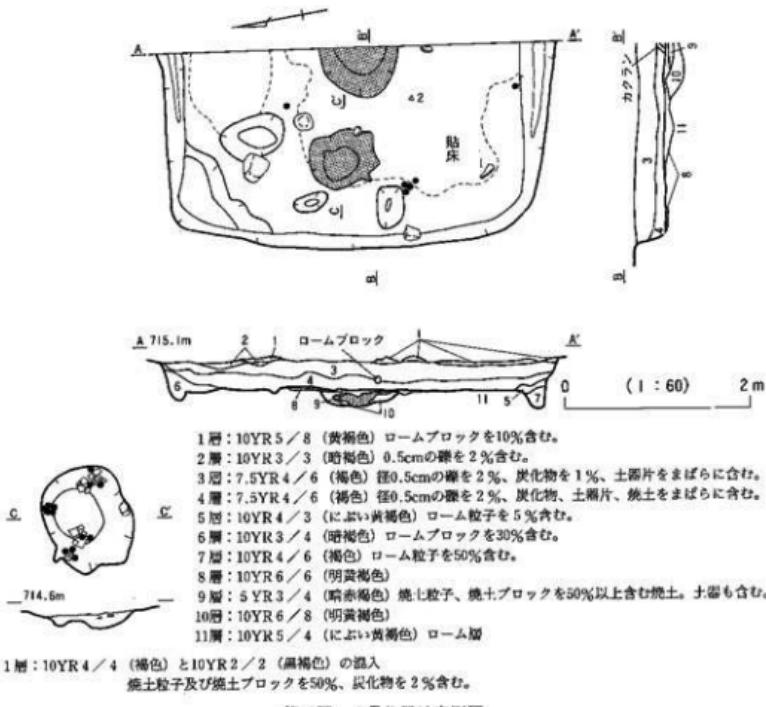
第3表 3号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1	手づくね	7.0 4.5 2.6	体部は短く、器形は一定しない。	外面一指圧痕 内面一指圧痕	胎土に雲母、小石を含む。 7.5YR6/6(橙色)
2	高坏	— 9.8 (5.2)	脚部は「ハ」の字状に広がる。	外面一ハラミガキ 内面一坏部ヘラミガキ、黒色処理 脚部ヘラケズリ、ナデ	胎土は悪く砂粒、小石を多く含む。 10YR6/3(にぶい橙色)
3	坏	(12.6) (6.0) (4.1)	体部は直線的に外反する。底部はやや丸底。	外面一ロクロナデ、底部ヘラ切り 内面一ロクロナデ	焼成良好 7.5Y6/1(灰色)
4	高台付坏	15.0 10.3 4.0	体部は直線的に外反し、底部は厚い。	外面一ロクロナデ、底部回転ヘラ切り 内面一ロクロナデ	胎土に砂粒、小石を含む。 10YR6/1~7/1(褐色~灰白色)
5	長胴甕	(25.6) 8.6 38.5	口縁部は短く外反する。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ、ハケ 内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ	両面炭化物付着。 胎土に雲母、砂粒を含む。 10YR6/4(にぶい黄橙色)
6	長胴甕	— 8.9 (9.5)		外面一ナデ、底部木葉痕 内面一ナデ、底部ハケ	胎土に雲母、砂粒を含む。 10YR6/3(にぶい橙色)
7	長胴甕	— 9.0 (11.8)		外面一ナデ、底部木葉痕 内面一ハケ、ナデ	外面、部分的に非常に赤味を帯びている。 7.5YR6/4(にぶい橙色)
8	小形甕	10.6 — (5.0)	口縁端部がわずかに外反する。	外面一ナデ 内面一ヘラケズリ後ナデ	内面炭化物付着 胎土に雲母、砂粒を含む。 10YR6/3(にぶい黄橙色)
9	壺	— 9.0 (13.3)	胴部は球形に膨らみ、ややゆがむ。	外面一ナデ 内面一ナデ	内面炭化物付着。胎土に雲母、砂粒を含む。 7.5YR7/6(橙色)

同じに煙道までの内壁が傾きをみせ、芯石の内面がカマドの内壁の一部であったことを伺わせる。火焼部は床よりわずかながら低くあり、ややレンズ状の底面全域に極度の火熱を受けた状況が観察でき、その面は堅固であった。また、芯石の内面とそれに続く内壁面が、火焼部と同様に火熱を受けて赤色ないし赤褐色を帯びていた。煙道は、壁から1.15mほど東に伸び、内面は火焼部ほどは堅固でないものの、部分的に焼土の痕跡を確認している。

遺物（第12図）須恵器は高台付坏（4）、底部ヘラ切りによる坏（3）、土師器は手づくね（1）、高坏（2）、長胴甕（5～7）、小型甕（8）、壺（9）があり、カマド及び南東コーナーの土坑状落ち込み部より、作国可能な土器類の多くの出土が集中する。

本址は、古墳時代後期に時期判定を考える。



第13図 4号住居実測図

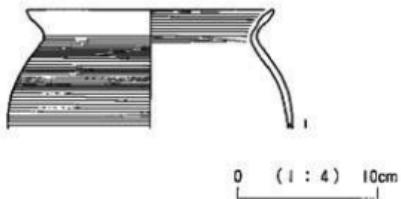
4号住居址

遺構（第13図）調査区の南西、C—5グリッドに位置する。 $(2.2) \times 4.2\text{m}$ の方形を呈するプラン形状と想定する。しかし、1・2号住居址と同様に、カマドを含むおよそ45%が未確認である。検出した壁の形状と方向から、主軸はおよそN-100°-Eを指すものと思われ、2・3号住居址とほぼ一致する。

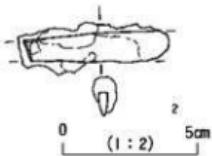
覆土は、擾乱を受けた箇所も見受けられるが、6層による。

床は、部分的に明黄褐色の粘土による貼床が施されるが、基本的には掘削した最下面を叩き締めたものであり、壁に近い箇所ではやや軟弱であった。

壁残高は、28~32cmを測り、プランから床まではほぼ垂直に落ち込み、周溝は僅かながら南北壁下に確認した。またビットは、3穴ほど確認したが、柱穴を想定できる根拠は得られなかつた。更に、床の中央部に2ヶ所の焼土を主体とする、15cm前後の深さの円形の窪みを検出している。内部には、火焼状況を示す土器片を多量に包含するが、窪みの内面には火焼状況を示す



第14図 4号住居址出土土器実測図



第4表 4号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1	壺	(17.4) — (8.6)	口縁部は「く」の字状に外反する。胴部は球状を呈する。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部回転ロクロハケ 内面一口縁部回転ロクロハケ、胴部ロクロナデ	胎土に小石、砂粒を含む。 外面炭化物付着 7.5YR6/6(橙色)

第5表 4号住居址出土鉄器観察表

番号	器種名	法量	重さ	特徴
2	刀子	(5.3) 0.8 0.4	11.6	平鍊平造り。切先及び茎尻が欠損する。

痕跡はなかった。

遺物（第14・15図）須恵器は壺、甕、長頸壺が、土師器は内面黒色処理の壺、鉢や、長胴甕、甕、ロクロ成形甕（1）が、床面や焼土を含む埋み内部より出土している。また機種は不明だが、灰釉陶器片もみられる。

この他に、鉄器として刀子（2）が床面直上より1点出土している。

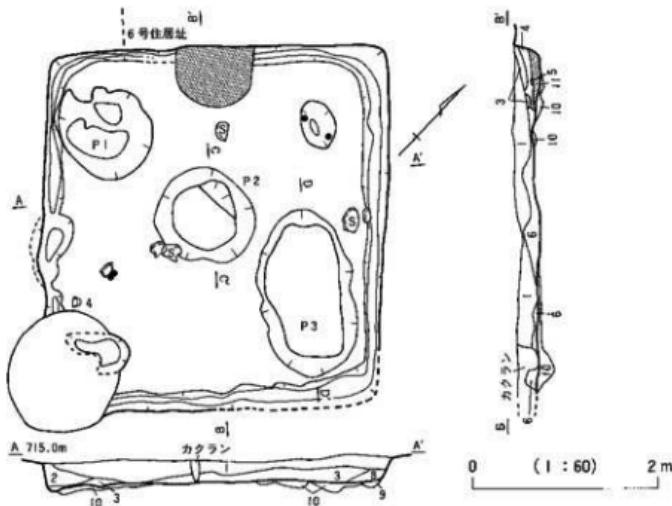
尚、全体的な遺物の出土量が少なかったが、これらの諸特徴から本址は、平安時代前期に時期判定を考える。

5号住居址

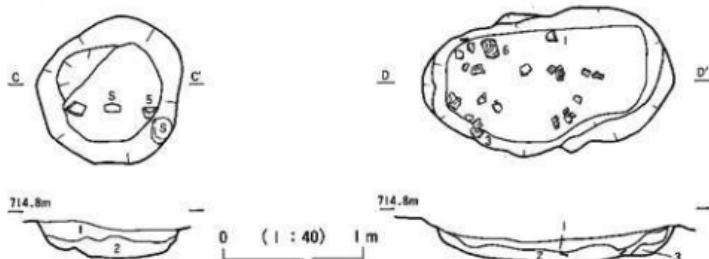
遺構（第16図）調査区の南西、B-6グリッドに位置し、6号住居址を切って構築し、1号土坑に切られる。3.9×3.7mの規模の、方形を呈するプラン形状であるが、東側コーナーから南側コーナーにかけて擾乱を受けている。南西壁のほぼ中央にカマドを有し、N-44°-Wに主軸を示す。

覆土は、一部擾乱を受けた箇所もあるが、8分層される。

床は、全体的に軟弱で、基本的には掘削した最下面を叩き締めたものであるが、覆土の下部または床下の堆積土内に、床の残骸と思われるハードローム粒子が混入する割合が高いことに、部分的に貼床を施した形跡を物語っていると推察する。

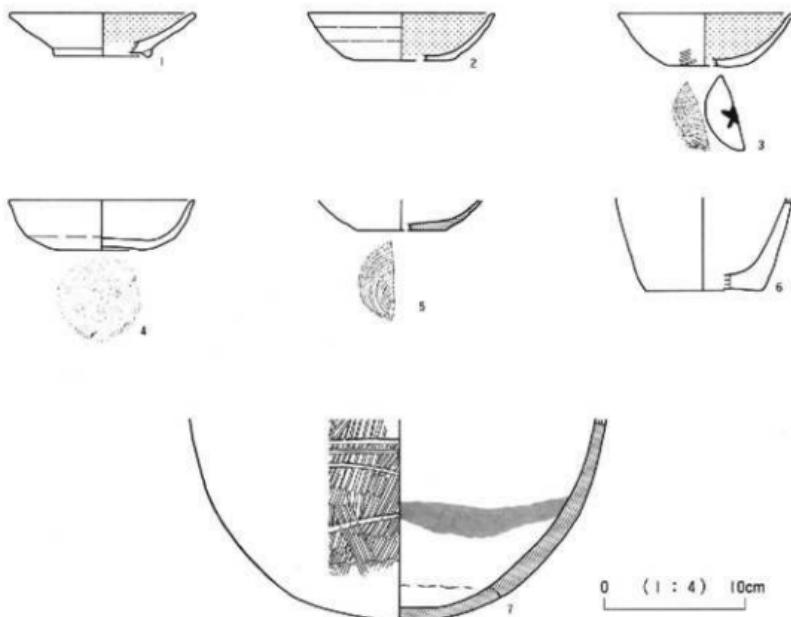


- 1層: 10YR 2 / 3 (黒褐色) ローム粒子を 5%、焼土粒子を 2%、炭化物をわずかに含む。
- 2層: 10YR 2 / 2 (黒褐色) ローム粒子を 5% 含む。
- 3層: 5Y 5 / 6 (オリーブ色) ハードローム。
- 4層: 5Y 3 / 1 (オリーブ黒色) ロームブロックを 7%、焼土ブロックを 2% 含む。
- 5層: 5Y 5 / 6 (オリーブ色) ハードローム。
- 6層: 10YR 2 / 3 (黒褐色) ローム粒子を 7% 含む。
- 7層: 2.5Y 4 / 4 (オリーブ褐色) 2.5YR 4 / 8 (赤褐色) の焼上及び焼土ブロックを 30%、5Y 5 / 6 (オリーブ色) のロームブロックを 7% 含む。
- 8層: 10YR 2 / 2 (黒褐色) ローム粒子を 5%、炭化物を 1% 含む。
- 9層: 10YR 4 / 6 (オリーブ褐色) ローム粒子を 10% 含む。
- 10層: 10YR 4 / 4 (褐色) ロームブロックを 50% 含む。
- 11層: 2.5Y 3 / 3 (暗オリーブ褐色)



- 1層: 10YR 4 / 4 (褐色) ロームブロックを 50% 含む。
- 2層: 10YR 3 / 2 (黒褐色) ロームブロックを 10% 含む。
- 1層: 10YR 4 / 3 (にじい黄褐色) ロームブロックを 7%、焼土ブロックを 2% 含む。
- 2層: 10YR 2 / 1 (黒色) ロームブロックを 30%、焼土ブロックを 15% 含む。
- 3層: 10YR 2 / 1 (黒色) ローム粒子を 50% 含む。

第16図 5号住居址実測図



第17図 5号住居址出土土器実測図

壁残高は、20~32cm余りを測り、プランから床まではほぼ垂直に落ち込み、周溝はカマドを除くほぼ全域に確認した。またピットは、2穴ほど確認したが、柱穴を想定できる根拠は得られなかった。

更に床下には、3基の土坑状の落ち込みが確認でき、何れもプラン確認は住居址の覆土除去後に確認したもので、被覆する遺物の観察では住居址内からのそれと大きな違いがみられない。P 1は、 1.1×0.9 mの規模で深さが0.25mで、プラン形状も内面形も不整形であり、遺物も微量であった。P 2は、 1.1×1.0 mの円形プランで、深さは0.15mを測る。P 3は、 1.8×1.0 mの梢円形を呈し、0.30mの深さを測り、覆土中に焼土が混入する。住居址内部よりもまとまった遺物が被覆される。

カマドは、床の確認レベルで火焼部痕のみ確認でき、袖部または袖部に用いられる石材も確認していない。

遺物（第17図）須恵器は壺（5）、大甕（7）、土師器の壺（2~4）、皿（1）、長胴甕、ロクロ成形の甕（6）がみられるが、全体的に出土量が少なく、その中でも完形資料に乏しい。土師器壺は、内面黒色処理を施すもの（2、3）とそうでないもの（4）がみられる。また判読ができないが、底部に墨書きがみられるもの（3）もある。食器類はいずれもロクロ成形によ

るものである。これらの出土土器から本址は、平安時代前期に時期区分を想定する。

第6表 5号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1	皿	(13.2) (6.8) 3.1	体部は直線的に開く。外面一ロクロナデ、高台貼り付け後ナデ 内面一ヘラミガキ、黒色処理		5YR6/6(橙色)
2	壺	(13.2) (6.8) 3.4	外面一ロクロナデ 内面一ナデ後ヘラミガキ、黒色処理		胎土に砂粒を含む。 10YR7/4(にぶい黄橙色)
3	壺	(12.5) (4.5) 3.8	外面一ロクロナデ、底部回転糸切り 内面一ヘラミガキ、黒色処理		胎土に乳白色小石、雲母、砂粒を含む。底部に墨書きを有す。 10YR7/4(にぶい黄橙色)
4	壺	(12.8) 6.1 3.6	内湾気味に開き、口縁部で僅かに外反する。	外面一ロクロナデ、底部回転糸切り 内面一ヘラミガキ	両面炭化物付着 胎土に雲母、小石を含む。 10YR6/2(灰黄褐色)
5	壺	— (6.0) (2.2)		外面一ロクロナデ、底部回転糸切り 内面一ロクロナデ	胎土に砂粒を含む。 5Y7/3(浅黄色)
6	甕	— (4.2) (6.6)		外面一ナデ、ヘラナデ底部木葉痕 内面一ナデ	両面炭化物付着 10YR6/3(にぶい橙色)
7	大甕	— (14.0) (15.0)	底部丸底	外面一タキ後一部横位ハケ 内面一ナデ	一部6号住上部から出土内面炭化物付着 胎土に小石、砂粒を含む。 2.5Y7/2(灰黄色)

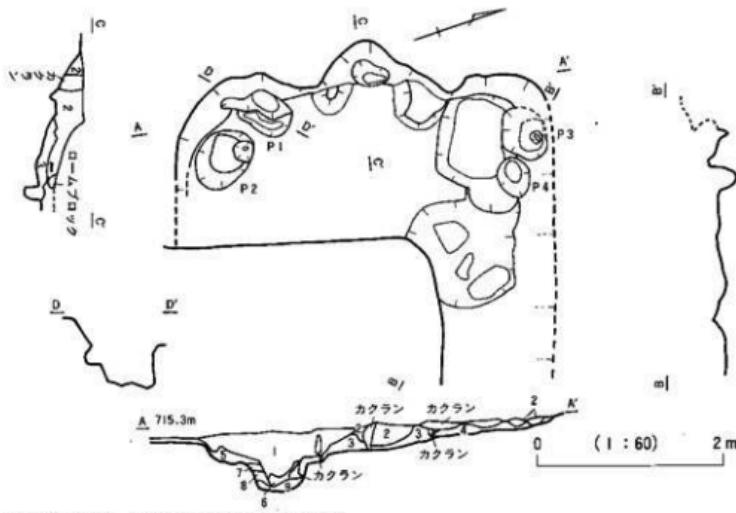
6号住居址

遺構（第18図）調査区の南西、B-6グリッドに位置する。5号住居址と重複関係にあり、本址はそれに切られる。第1次調査でその大部分を確認し、カマドを含む一部を第3次調査で確認した。確認できたカマドを中心とする西壁が4.0mを測る、やや隅丸の方形を呈するプラン形状と思われる。西壁を基準とした場合、主軸はN-74°-Wを指すものと思われる。

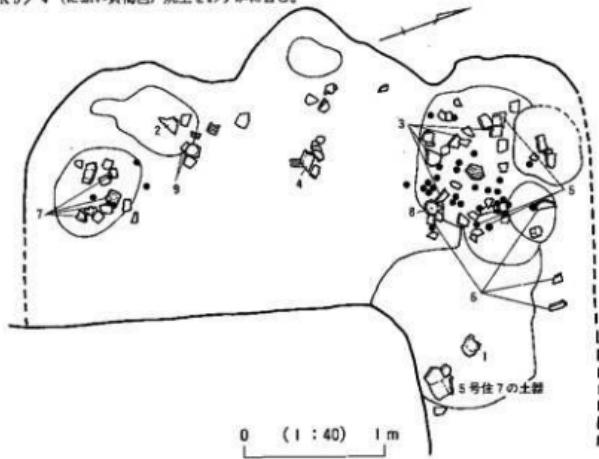
覆土は9分層（P2覆土も含む）できたが、本址の上部は開田時にかなりの削平を受けていた。

床は、カマド前方部を除き全体的に軟弱で、地山層の叩き締めを基本としている。

壁残高は20~30cmあまりで、壁下の周溝は認められなかった。また配置的に見て、柱穴としての確認はできなかったが、P1 (53×40×45cm)、P2 (70×52×30cm)、P3 (57×43×14cm)、P4 (40×34×31cm)、等のピットを検出した。他にカマドの右脇に、P3・P4と重複する形で遺物を多く被覆する土坑状の窪みが認められる。



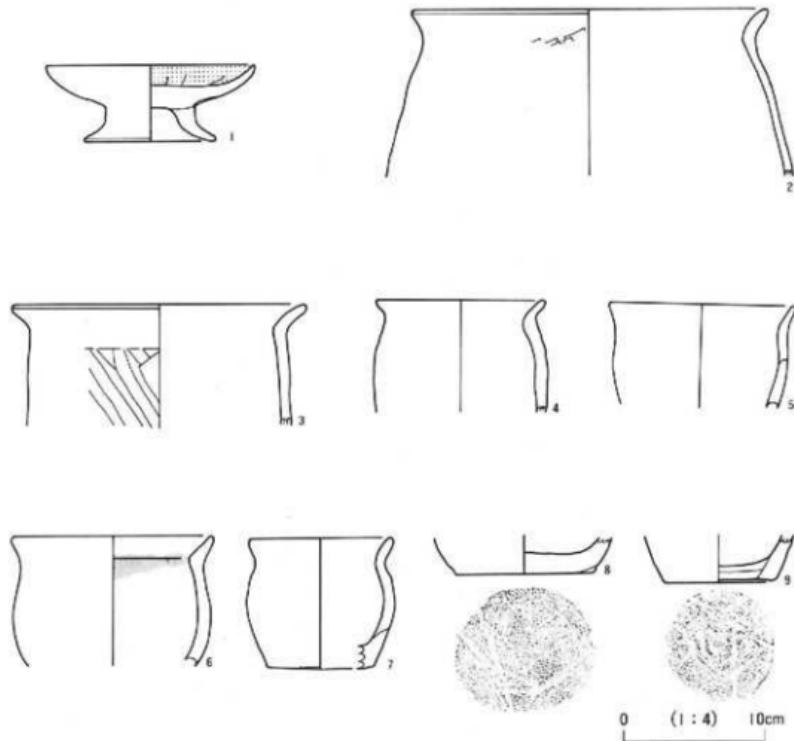
1層: 10YR 2/1 (黒色) 赤褐色焼土をわずかに含む。
 2層: 5 YR 5/6 (明赤褐色) ローム粒子を20%、炭化物を5%、焼土を5%含む。
 3層: 5 YR 4/6 (赤褐色) 焼土粒子を30%、炭化物をわずかに含む。
 4層: 10YR 4/3 (にぶい黄褐色) 10YR 3/1 (黒褐色) をわずかに含む。
 5層: 10YR 3/2 (黒褐色) ローム粒子をわずかに含む。
 6層: 10YR 5/4 (にぶい黄褐色) 焼土をわずかに含む。
 7層: 10YR 2/3 (黒褐色) 焼土をわずかに含む。
 8層: 10YR 3/2 (黒褐色) 焚土、ローム粒子をわずかに含む。
 9層: 10YR 5/4 (にぶい黄褐色) 焚土をわずかに含む。



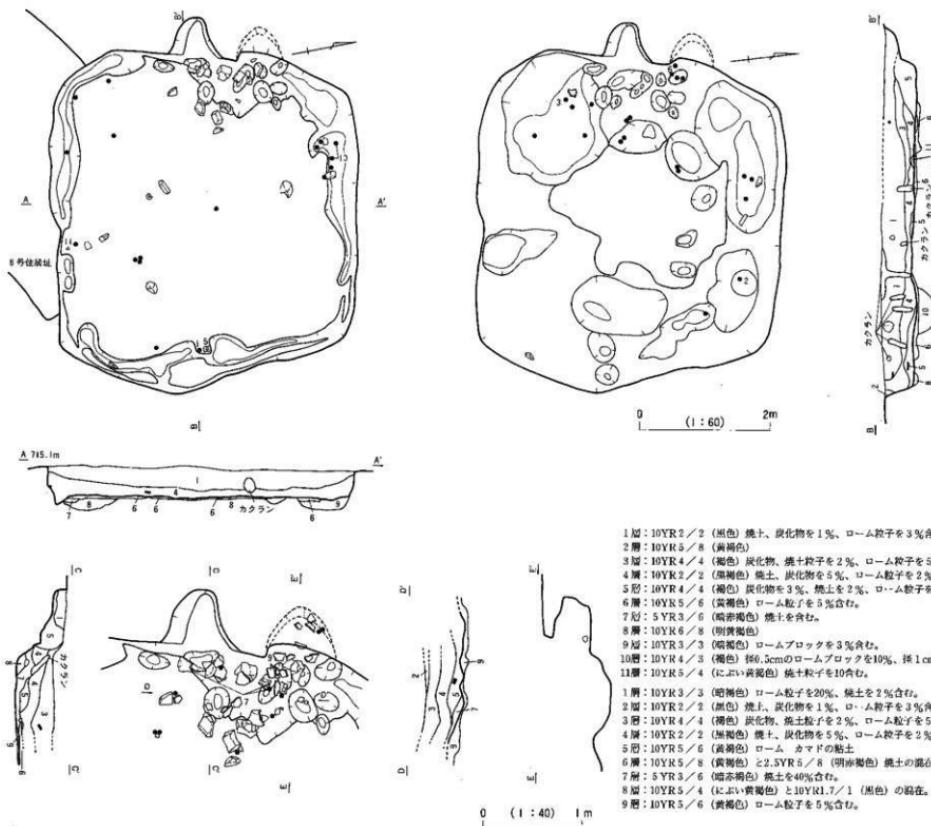
第18図 6号住居址実測図

カマドは、袖部を形成していたと思われる地山層の高まりと、煙道と思われる張り出し部が確認できただけで、火焼部を含むカマドの形跡はなかった。

遺物（第19図）土器器は壺、高壺は内面黒色処理を施すもの（1）、甕（2・8）、長胴甕（3・9）、小形甕（4～7）等で、覆土ないし床面からの出土量は少なく、ピットや土坑状の窪み等の施設内に集中する。甕類の特徴としては、器面の調整がヘラナデないしナデによるものが主体である。本址は、奈良時代の中頃から後半にその時期を推定する。



第19図 6号住居址出土土器実測図



第20図 7号住居址実測図

第7表 6号住居址出土土器観察表

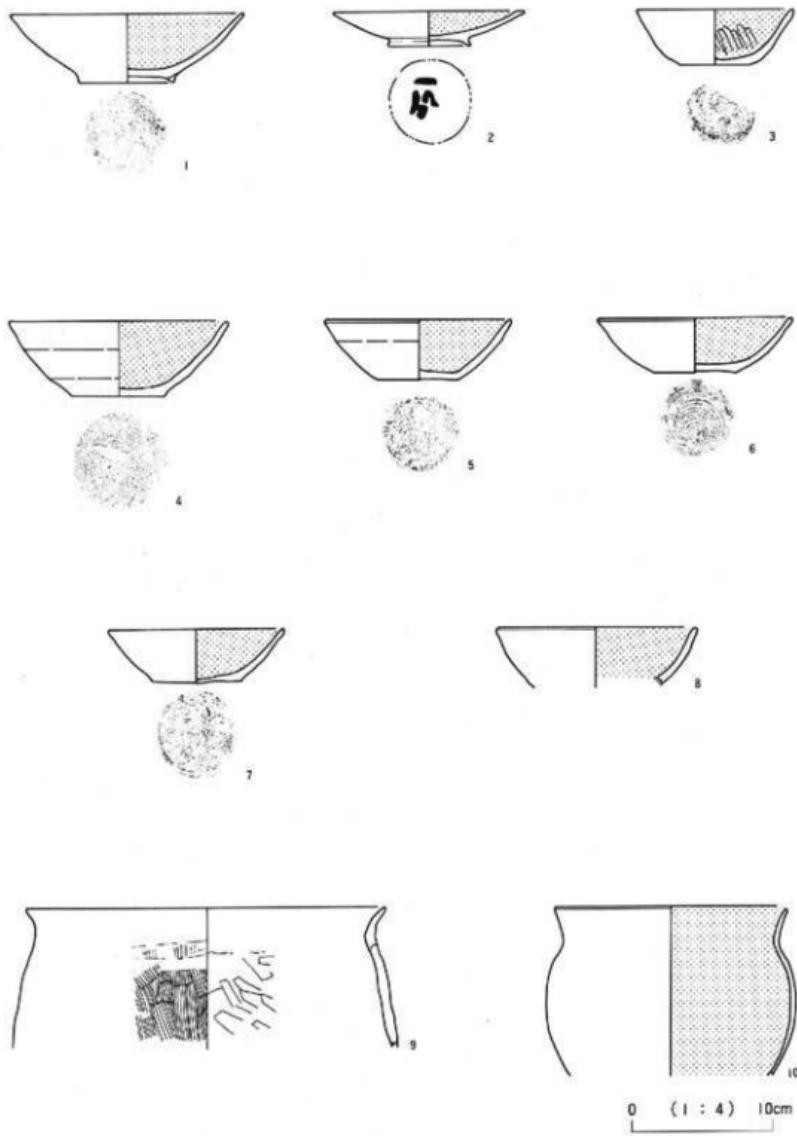
番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1	高壺	(15.0) (9.2) 5.2	壺部は皿状に浅く、脚部は低く「ハ」の字状に短く開く。	外面一壺部ナデ後ヘラミガキ脚部ヨコナデ 内面一壺部口縁部ヨコナデ、ヘラナデ、黒色処理・脚部ヘラケズリ後ヨコナデ	胎土に雲母、砂粒を多く含む。 10YR7/4(にぶい黄橙色)
2	甕	(25.2) — (11.9)	口縁部は短く外反し、脚部は膨らみを見せる。	外面一ヘラナデ 内面一ナデ	胎土に雲母、小石、砂粒を含む。 10YR8/3(浅黄橙色)
3	長胴甕	20.5 — (8.6)	口縁部は短く外反し、脚部は張らず下降する。	外面一口縁から頸部ヨコナデ、脚部ヘラナデ 内面一口縁から頸部ヨコナデ、脚部ナデ	内面炭化物付着 胎土に雲母、砂粒を含む。 10YR7/4(にぶい黄橙色)
4	小型甕	12.0 — (8.0)	口縁部は「く」の字状に外反し、脚部はやや膨らみを見せる。	外面一ナデ 内面一口縁部ヨコナデ、脚部ナデ	胎土に雲母、砂粒を含む。 10YR6/4(にぶい黄橙色)
5	小形甕	10.0 (7.6) 9.2	口縁部は緩やかに短く外反する。	外面一二次焼成により観察不可 内面一ナデ	二次焼成により赤色の箇所がある。内面炭化物付着 10YR6/3(にぶい黄橙色)
6	小形甕	14.2 — (9.2)	口縁部は「く」の字に外反し、脚部はやや膨らみを見せる。	外面一二次焼成により観察不可 内面一ナデ	内面炭化物付着 胎土に小石、砂粒を含む。 10YR6/2(灰黄褐色)
7	小形甕	(12.8) — (7.3)	口縁部は短く外反し、脚部はやや膨らみを見せる。	外面一二次焼成により観察不可 内面一ナデ	胎土に雲母、砂粒を含む。 内面炭化物付着 10YR6/3(にぶい黄橙色)
8	甕	— 9.7 (2.7)		外面一底部木葉痕(2枚使用) 内面一ナデ	胎土に雲母、砂粒、小石を含む。 10YR6/4(にぶい黄橙色)
9	長胴甕	— 7.8 (3.4)		外面一ナデ、底部木葉痕 内面一ナデ	胎土に雲母、砂粒を含む。 10YR7/4(にぶい黄橙色)

7号住居址

遺構(第20図)調査区の南西、B-6グリッドに位置する。8号住居址と重複関係にあり、本址はそれを切る。5.1×4.6mの規模で、東壁のほぼ中央部が張り出す、変形5角形を呈するプラン形状である。西壁のほぼ中央にカマドを有し、N-33°Wに主軸を示す。

覆土は5分層から構成されるが、部分的に植物の根と思われる擾乱を受けている。全体的に炭化物及び焼土が含まれる。6層は貼床で、7から11層は床下の埋土と捉えた。

床は、ほぼ全域に貼床が施され、堅固である。また、貼床を除去した後の掘り方は、中央部に地山層を残す外、不整形な土坑ないしピット状の窪みが確認でき、その覆土からは完形品を



第21図 7号住居址出土土器実測図

含む土器を本址覆土と匹敵する割合で出土している。

壁残高は、40~45cmを測り、プランから床までほぼ垂直に落ち込む。周溝は、カマド周辺を除き壁下のほぼ全域に確認する。しかし、東壁の張り出し部の直下では、周溝との間にテラス状の平坦面を有する。

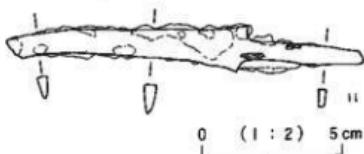
第8表 7号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1	碗	(16.8) 6.9 4.9	体部はやや内湾気味に大きく開く。	外面一ロクロナデ、底部回転糸切り後高台貼り付け 内面一ヘラミガキ、黒色処理	10YR6/4(にぶい黄橙色)
2	皿	13.2 6.0 2.5	体部は大きく外反する。	外面一ロクロナデ 内面一口縁部ヘラケズリヘラミガキ、黒色処理	底部に墨書「?」を有す。 胎土に雲母、砂粒を含む。 7.5YR6/6(橙色)
3	壺	(11.1) 4.9 4.0	体部は内湾気味に外反する。	外面一ロクロナデ、底部回転糸切り 内面一ヘラミガキ、黒色処理	外面炭化物付着。胎土は悪く雲母、小石を含む。 7.5YR6/6(橙色)
4	壺	15.6 6.6 5.2	体部は内湾気味に外反する。	外面一ロクロナデ、底部回転糸切り 内面一ヘラミガキ、黒色処理	焼成不良 胎土に砂粒を含む。 10YR8/2(浅黄橙色)
5	壺	(13.0) 5.6 4.2	体部は内湾気味に外反する。 内側底部中央に盛り上がりを見る。	外面一ロクロナデ、底部回転糸切り 内面一ヘラミガキ、黒色処理	胎土に小石、砂粒を含む。 7.5YR7/3(にぶい橙色)
6	壺	13.2 5.6 3.9	体部は内湾気味に外反する。	外面一ロクロナデ、底部回転糸切り 内面一ヘラミガキ、黒色処理	外面炭化物付着 胎土に砂粒を含む。 7.5YR6/4(にぶい橙色)
7	壺	(12.6) 6.3 3.8	体部はやや内湾気味に外反する。	外面一ロクロナデ、底部は回転糸切り後ヘラ切り 内面一ヘラミガキ、黒色処理	胎土に砂粒を含む。 7.5YR7/4(にぶい橙色)
8	壺	(14.4) — (4.3)	体部は内湾気味に外反する。	外面一ロクロナデ 内面一ヘラミガキ、黒色処理	胎土に赤褐色、乳白色の砂粒を含む。 10YR7/4(にぶい黄橙色)
9	甕	(25.6) — (9.9)	口縁部は「く」の字状にゆるく外反する。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ハケ 内面一口縁部ヘラナデ、胴部指ナデ	胎土に雲母、砂粒を含む。 10YR5/6(黄褐色)
10	甕	(16.7) — (12.0)	口縁部はやや外反し、胴部は球状を呈する。	外面一ロクロナデ後ヘラミガキ 内面一口縁部ヘラミガキ、胴部ヘラナデ、黒色処理	ミガキ痕あるが不明瞭 外面炭化物付着 10YR7/4(にぶい黄橙色)

カマドは、既に袖部の形跡ではなく、袖部を形成していた芯石の痕跡を示すピット状の窓みが袖部が位置すると思われる箇所からそれぞれ2つづつ確認した。火焼部は、焼土の散乱は確認できるものの、過度の火焼状況を示す痕跡は認められなかった。煙道部は、壁から突出する形で確認した。またカマドの周辺には、部分的に火焼状況を残す拳大から人頭大の割躰石が散乱し、土器等の遺物も集中して出土した。

更に、カマドの右脇の壁を抉る状況で、プラン確認面から40cmの横穴状の施設があり、内部には、拳大の割躰石及び土器片を含んでいた。

遺物（第21・22図）須恵器は壺、高台付壺、甕、突帶付四耳壺が、土師器は壺（3～8）、鉢（1）、底部外面に墨書きを残す皿（2）、甕、長胴甕（9）、小形甕（10）等がみられ、鉄器としては刀子（11）が出土している。他の住居址より量的には豊富であるが、覆土中の破片が主である。器形のとどめるものは、カマドの前方部一帯に集中する。また掘り方出土遺物との形式的変化はあまりみられない。食器類の特徴としては、すべてロクロ成形によるもので、土師器は内面黒色処理を施している。これらの特徴から本址は、平安時代の前期にその時期を推定する。



第22図 7号住居址出土鐵器実測図

第9表 7号住居址出土鐵器観察表

番号	器種名	法量	重さ	特徴
11	刀子	(12.8) 1.7 0.4	16.3	平様平造り。関が両側に造り出されている。茎部に把と思われる木目が残存している。

8号住居址

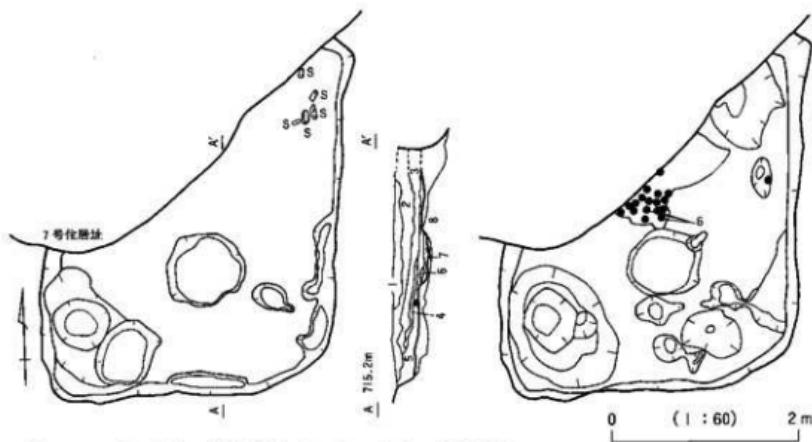
遺構（第23図）調査区の南西、B-6グリッドに位置する。7号住居址と重複関係にあり、本址はそれに切られる。6.0×3.2mの規模で、長方形を呈するプラン形状であり、カマドは確認できなかった。7号住居址に破壊された北壁にカマドの存在を仮定するならば、N-2°-Eに主軸を与える。

覆土は7分層から構成され、全体的に炭化物及び焼土が含まれる。

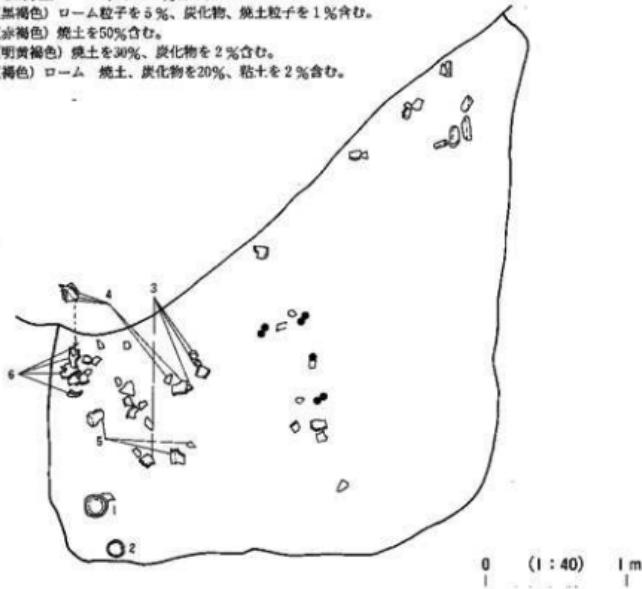
床は、全体的に軟弱で、貼床を構成していたと考えられるローム粒子ないしブロックが覆土中に含まれることから、既に埋没時に破壊を受けている可能性が考えられる。

壁残高は25～35cmあまりで、壁下の周溝は、それと近似する窓みが部分的に認められる。

また、土坑状の窓みP1(88×80×14cm)、P2(75×57×18cm)、P3(55×52×25cm)が、検出された。

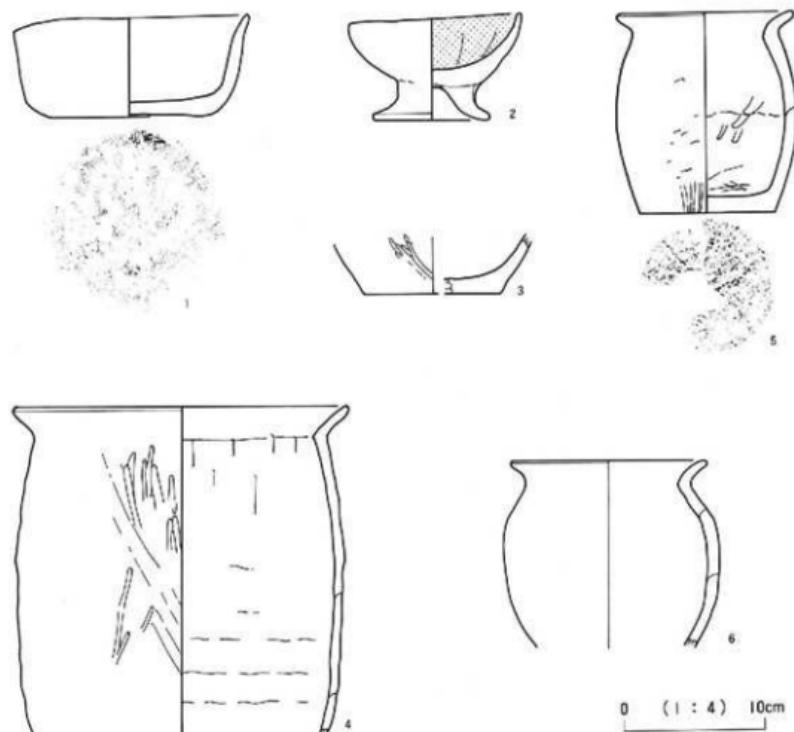


- 1層: 2.5YR 4/3 (オリーブ褐色) 径0.5~1cmのロームブロックを20%含む。
- 2層: 2.5YR 3/2 (黒褐色) ローム粒子を3%含む。
- 3層: 2.5YR 3/3 (暗オリーブ褐色) ローム粒子を7%、炭化物、焼土粒子を1%含む。
- 4層: 2.5YR 3/1 (黒褐色) ローム粒子を2%含む。
- 5層: 10YR 2/2 (黒褐色) ローム粒子を5%、炭化物、焼土粒子を1%含む。
- 6層: 5 YR 4/6 (水褐色) 焼土を50%含む。
- 7層: 10YR 6/6 (明黄褐色) 焼土を30%、炭化物を2%含む。
- 8層: 10YR 4/4 (褐色) ローム 焼土、炭化物を20%、粘土を2%含む。



第23図 8号住居址実測図

遺物（第24図）須恵器の出土はなく、土師器は高坏（2）、鉢（1）、壺（3）、長胴甕（4）、小形壺（5・6）等がみられ、鉄器としては刀子も床下から出土している。他の住居址と比較し器形をとどめるものが多いが、全体の出土量は乏しい。また掘り方出土との形式的変化はあまりみられない。壺類の特徴としては、器面の調整がヘラミガキないしナデによるものが主体である。これらの特徴から本址は、奈良時代の前半部にその時期を推定する。



第24図 8号住居址出土土器実測図

第10表 8号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1	鉢	16.6 10.8 7.1	底部から全体にかけて内湾しながらほぼ直線に立ち上がる。器高が一定せず、口縁部がゆがんでいる。	外面一ナデ、底部木葉痕 内面一ナデ、	風化が激しい。胎土に雲母砂粒を含む。 7.5YR7/6(橙色)
2	高杯	12.0 8.0 7.5	杯部は半球状を呈し、脚部は短く「ハ」の字に開く。	外面一杯部ナデ後ヘラミガキ脚部ヨコナデ 内面一杯部口縁ヨコナデ、ヘラナデ、黒色処理、脚部ヨコナデ	胎土に雲母、砂粒を多く含む。部分的に赤味を帯びている。 10YR7/4(にぶい黄橙色)
3	甕	— (9.6) 3.6		外面一部ヘラミガキ、底部木葉痕後中心部ヘラミガキ 内面一部ヘラナデ、ヘラミガキ、ナデ	胎土に雲母、砂粒を含む。 10YR6/4(にぶい黄橙色)
4	長胴甕	(23.6) — (23.3)	口縁部は短く外反し、体部は張らず内湾気味に下降する。	外面一口縁部ヨコナデ、ヘラナデ後ミガキ、一部ヘラミガキ 内面一上部ヘラナデ、ナデ、下部ナデ	外面炭化物付着。胎土に雲母、砂粒、小石を含む。 10YR6/3(にぶい黄橙色)
5	小形甕	(12.6) (9.6) 14.3	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部はやや膨らむ。	外面一口縁部ヨコナデ、ヘラナデ後ミガキ底部木葉痕 内面一口縁部ヨコナデ、ヘラナデ、ナデ	外面炭化物付着。胎土に雲母、砂粒を含む。 10YR6/3(にぶい黄橙色)
6	小形甕	14.0 — (13.2)	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状に膨らむ。	外面一ナデ、二次焼成により観察不可 内面一ナデ	外面炭化物付着。胎土に小石、砂粒を含む。 10YR8/2(灰白色)

9号住居址

遺構（第25図）調査区の南西、A-7グリッドに位置する。本址のおよそ70%が開田時と思われる破壊を受けており、カマドを含む西壁部のみが確認できた。規模は残存する西壁ラインが3.7mを測り、方形を呈するプラン形状であるものと思われる。主軸は、カマドの位置から、N-82°-W前後に考えたい。

覆土は7分層から構成され、全体的に炭化物及び焼土が含まれる。

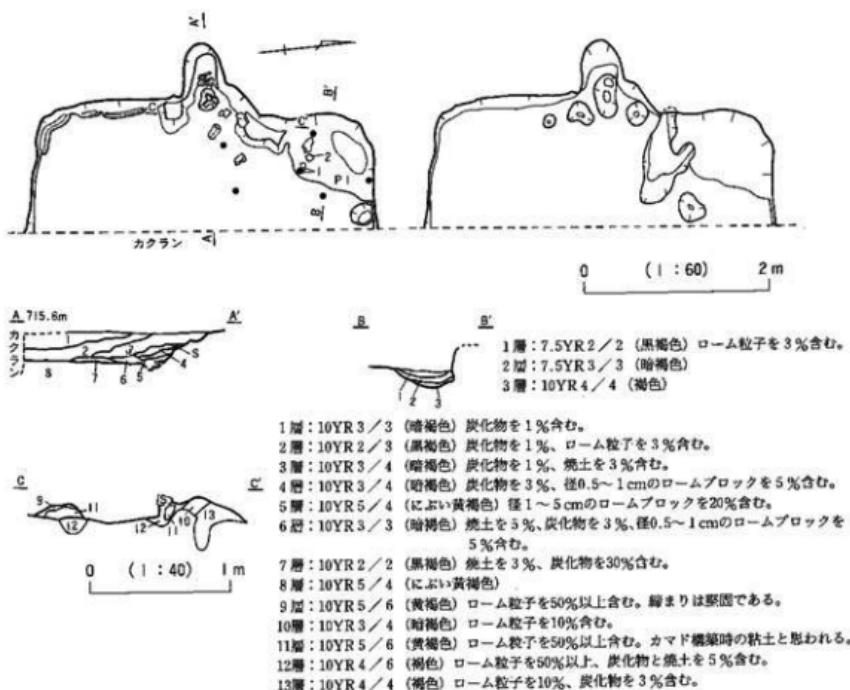
床は、全体的に地山層叩き締めを基本とした堅固な床で、部分的に貼床を施していた。

壁残高は22~30cmあまりで、壁下の周溝は、南側コーナーからカマドにかけて部分的に認められる。また、カマドの北側には土坑状の小穴P1（120×100×28cm）があり、内部に土器が包含される。

カマドについては、袖部を構成する盛り土の一部が残存するが芯石はなく、その痕跡を示

すピット状の窪みが、盛り土の下部よりそれぞれ確認された。火焼部には、過度の火焼状況を示す痕跡はなく、脚石が収納されていたと考えられるピット状の窪みがその中央部に位置していた。

遺物（第26図）須恵器は高台付壺が、土師器は壺（1・2）、甕、長胴甕、等がみられ、全体の出土量は乏しい。壺の中には、外面に墨書きで「井」の文字を記すものもみられる。これらの特徴から本址は、平安時代の前期にその時期を推定する。



第25図 9号住居址実測図



第26図 9号住居址出土土器実測図

第11表 9号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1	壺	12.2 5.8 4.2	体部は内湾気味に外反し、底部平底。	外面一ロクロナデ、底部回転糸切り 内面一ヘラミガキ、黒色処理	外面に墨書「井」の字を有す。胎土に雲母、砂粒を含む。 10YR4/2(灰黄褐色)
2	壺	(14.3) (8.2) 4.5	体部はやや内湾気味に外反する。	外面一ロクロナデ、底部回転ヘラ切り 内面一ヘラミガキ、黒色処理	外面に炭化物付着 10YR6/4(にぶい黄橙)

10号住居址

遺構（第27図）調査区の南西、A—7、B—7グリッドに位置する。本址の規模は、3.7×3.0mの方形を呈するプラン形状である。主軸は、N-104°-Eである。本址の南側壁を含む一部が既に破壊され、根菜類の栽培によるものと思われるトレンチ状の擾乱が幾筋もみられた。

覆土は15分層から構成され、全体的に炭化物を混入する。

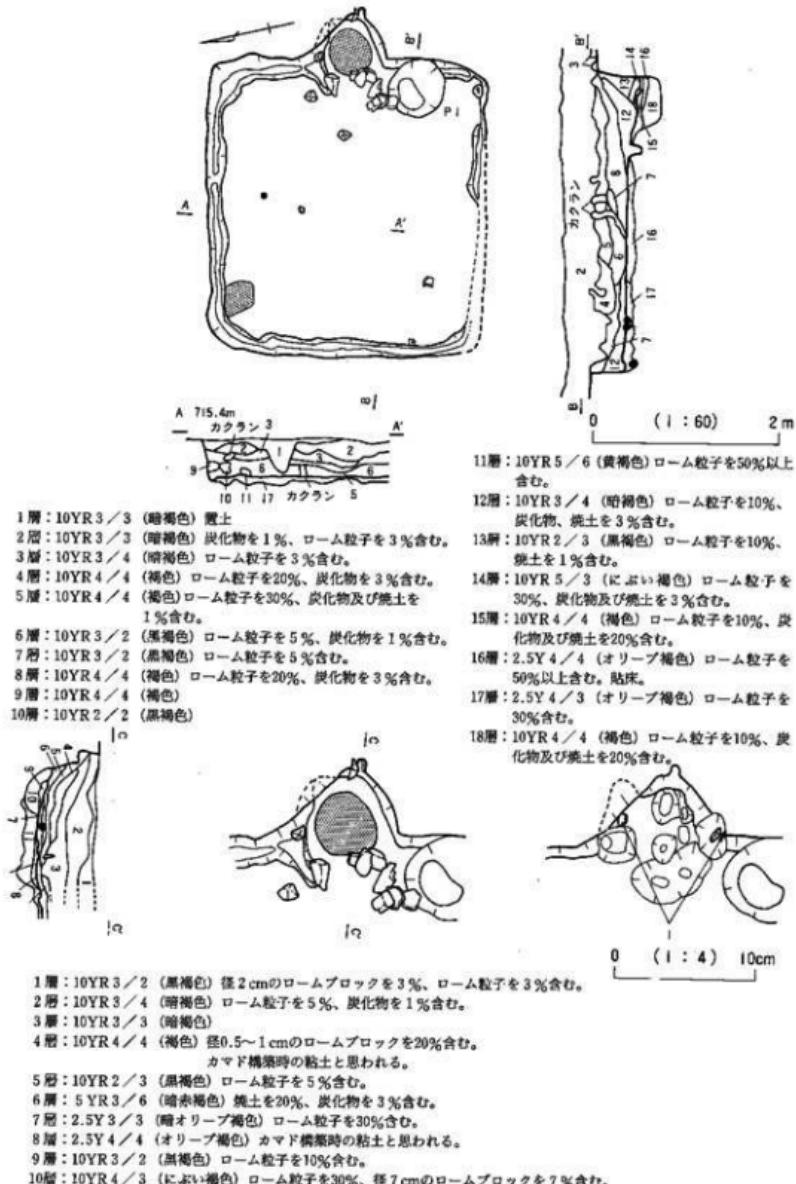
床は、貼床が施される中央部とカマド前方部が堅固に叩き締められ、壁に近い箇所は貼床はなく、軟弱さが観察できる。

壁残高は35～40cmを測り、壁下の周溝はほぼ全城に巡らされる。

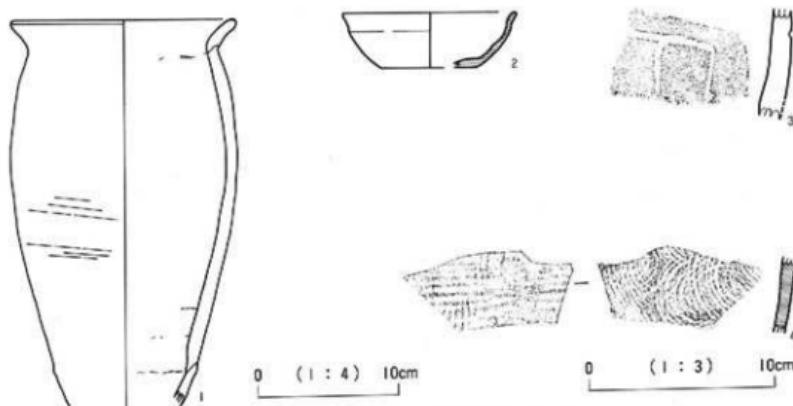
カマドは、東壁の中央に配置され、火焼部等の主体部分は壁から張り出した箇所に位置する。そして、袖部を構成する盛り土の一部と火熱を受けた打割石が残るが、掘り方からは壁に接触する状況で芯石の痕跡を示すピット状の窪みが認められた。火焼部には、過度の火焼状況を示す痕跡があり、それと同様の火焼状況が内部壁にも認められる。また、脚石が収納されていたと考えられるピット状の窪みもその中央部に位置していた。

またカマドの右脇には、炭化物及び焼土を多く含む土坑状の窪みP1 (60×60×25cm) がある。内部からは、わずかながら土器片も混入していた。

遺物（第28図）須恵器は、底部ヘラケズリを施す壺（2）、高台付壺、大甕を、土師器は壺、甕、長胴甕（1）等がみられ、全体の出土量は乏しい。また、焼成、胎土、調整等の観察から、明らかに併出する甕ないし長胴甕と特徴を共にする、棒状工具による沈線を施す小破片も出土している（3）。これらの特徴から本址は、奈良時代の前半部にその時期を推定する。



第27図 10号住居址実測図



第28図 10号住居址出土土器実測図・拓影図

第12表 10号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	型形の特徴	調整	備考
1	長胴壺	(15.8) (7.7) (27.7)	口縁部は「く」の字 状に外反する。	外面一ハケ後胴上半部ヨコ ナデ 内面一ハケ後上部ヨコナデ	内外面に炭化物付着 10YR6/4(にぶい黄橙)
2	壺	(12.2) (6.7) 3.9	体部は内湾気外反し、 口縁部でやや外反し ている。	外面一ロクロナデ底部回転 ヘラ切り 内面一ロクロナデ	外面に炭化物付着 10YR7/3(にぶい黄橙)

11号住居址

遺構（第29図）調査区の南西、A-6グリッドに位置する。本址の規模は、一辺が4.4mを測る、方形を呈するプラン形状と思われる。カマドを含むほぼ50%が既に床下まで破壊され、推測されるカマドの位置が東壁にあることを前提に、N-103°Eに主軸を想定したい。

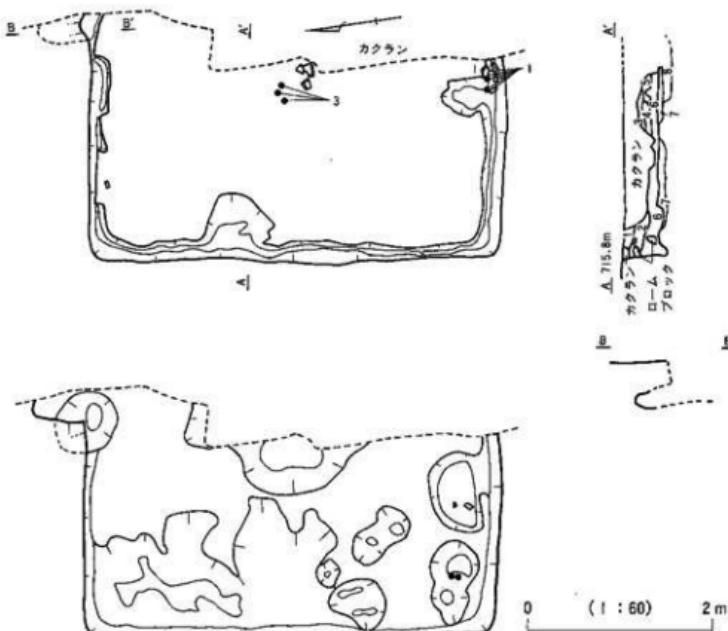
覆土は6分層から構成されるが、覆土の大半は擾乱土によるものである。

床は、ほぼ全域に貼床が施されて堅固であった。

壁残高は、わずかに残るプラン確認箇所から、36~40cmを測る。壁下の周溝は、部分的に途切れる箇所もみられるが、ほぼ全域に巡らされる。

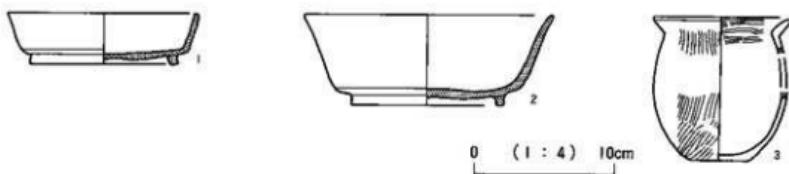
付属する施設としては、北壁のほぼ中央部に横穴が認められ、その到達点は60cmに及んだ。

遺物（第30図）須恵器は、高台付壺（1・2）、蓋、土師器はナデ調整の長胴壺、壺、小形壺（3）等がみられ、全体の出土量は乏しい。特に3の小形壺は、器形、焼成、胎土、調整等の観察から、他のそれとは異質のものであり、他地域からの流入品の可能性を示唆したい。これらの特徴から本址は、奈良時代の前半部にその時期を想定する。



1層: 10YR 3 / 3 (暗褐色) ローム粒子を 1%、炭化物を 1% 含む。
 2層: 10YR 3 / 3 (暗褐色) ローム粒子を 5%、炭化物を 1% 含む。
 3層: 10YR 4 / 4 (褐色) ローム粒子を 20% 含む。
 4層: 10YR 2 / 3 (黒褐色)
 5層: 10YR 5 / 6 (黄褐色) ローム粒子を 50% 以上含む。
 6層: 10YR 3 / 4 (暗褐色) ローム粒子を 20% 含む。
 7層: 10YR 5 / 3 (にぶい黄褐色) ローム粒子を 20% 含む。
 8層: 10YR 5 / 3 (にぶい黄褐色) ローム粒子を 30% 含む。

第29図 11号住居址実測図



第30図 11号住居址出土土器実測図

第13表 II号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1	壺	13.6 10.5 3.7	まっすぐ外開している。 内面一ロクロナデ	外面一ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	焼成良好。 7.5Y7/1(灰白色)
2	壺	17.6 10.7 6.4	まっすぐ外開している。	外面一ロクロナデ、底部回転ヘラ切り 内面一ロクロナデ	焼成良好 10BG4/1(暗青灰色)
3	小形甕	(9.6) 4.2 (10.2)	腹部は球状。口縁部は「く」の字状に外反する。	外面一ハケ、底部木葉痕 内面一ナデ、口縁部ハケ	10YR7/3(にぶい黄橙)

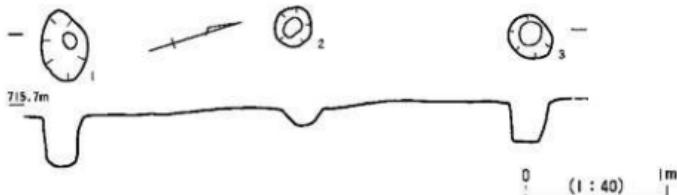
第2節 掘立柱建物址

1号掘立柱建物址

遺構（第31図）A-6グリッドに位置する。本址は3穴から成るピット列で、ほぼ直線状に1.6m間隔で配置される、掘立柱建物址の一部として捉えた。この周辺部は擾乱が多く、他の痕跡はまったくなかった。本址の方向は、N-18°-Eを示している。

各ピットは、P1 (50×34×30cm)、P2 (27×27×14cm)、P3 (35×30×35cm) である。

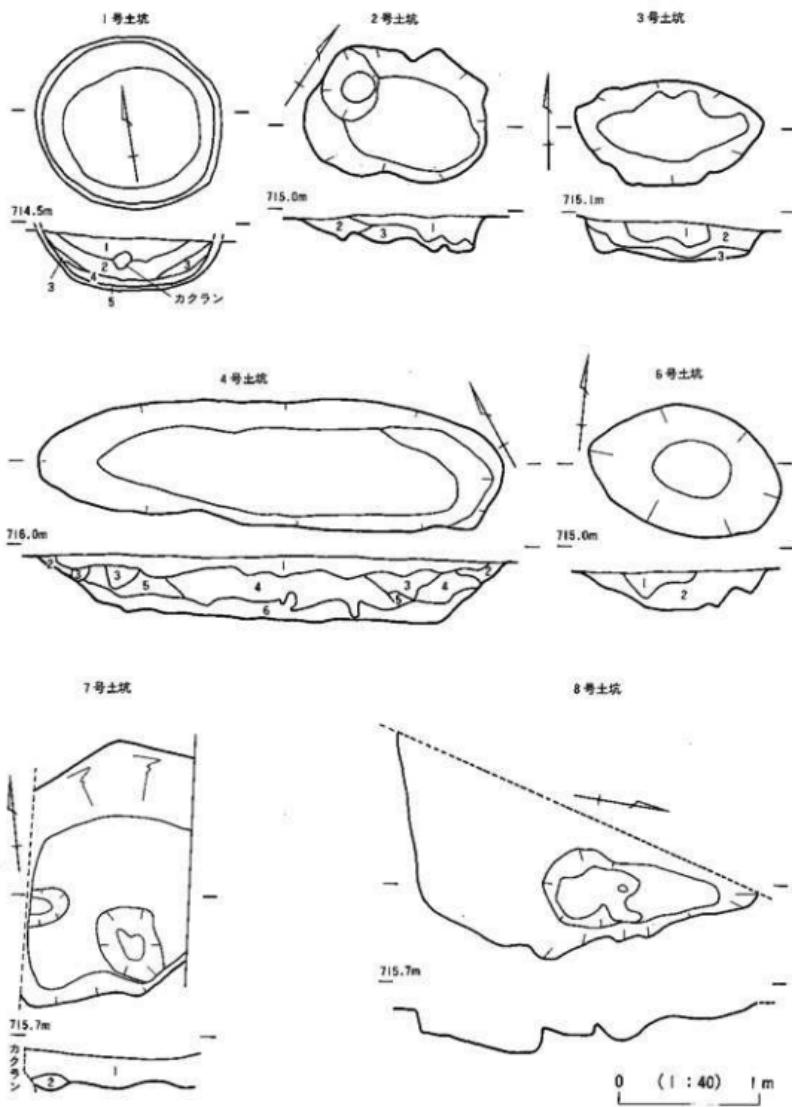
尚、出土遺物はないため、時期は不明である。



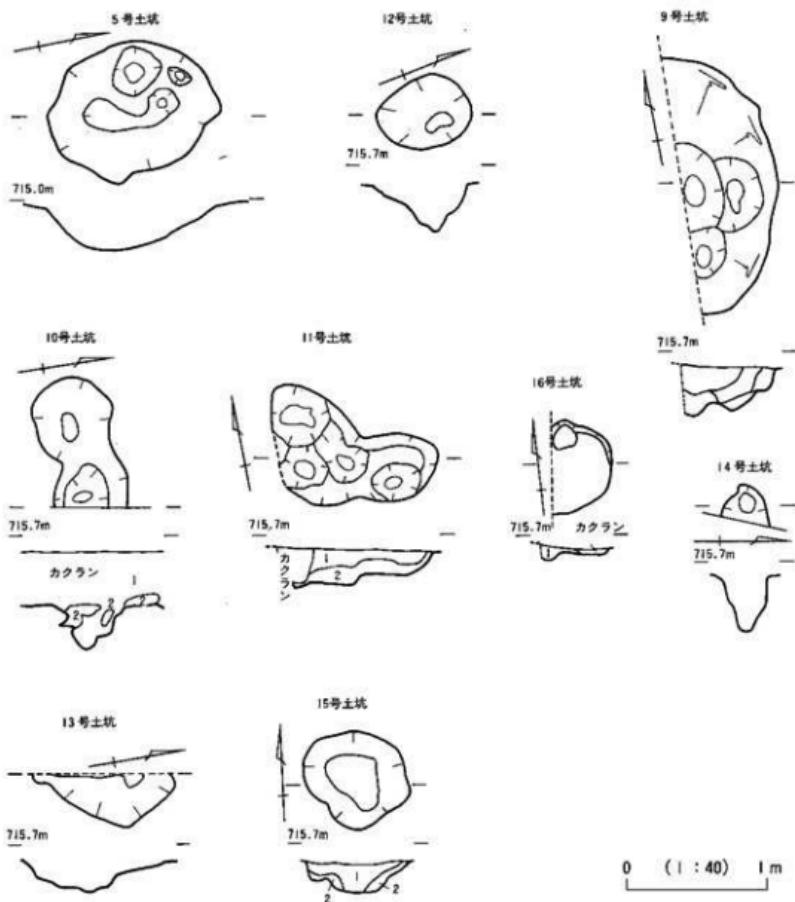
第31図 1号堀立柱建物址実測図

第3節 土 坑

遺構（第32図）主に、円形ないし橢円形のプラン形状で、住居址等の付属施設に当てはまらない単独の小穴を土坑として捉え、ピットと大別した。



第32図 土坑実測図 1



第33図 土坑実測図 2

第14表 土坑一覧表

番号	平面形	断面形	規模	覆 土	縛まり	粘性	備考
1	円形	半円形	130 246 43	1層10YR3/3(暗褐色) 2層10YR5/8(黄褐色)7.5YR4/6(褐色)を混在する 3層10YR5/4(にぶい黄褐色)石灰状のもろい凝固物 を80%含む 4層10YR2/1(黒色) 5層10YR5/4(にぶい黄褐色)石灰状のもろい凝固物	強 強 弱	弱 中 弱	
2	椭円形	不整形	130 85 27	1層10YR3/3(暗褐色) 2層10YR3/4(暗褐色)ローム粒子を3%含む 3層10YR4/4(褐色)ローム粒子を50%含む	中 中 強	強 中 強	
3	椭円形	台形	132 75 28	1層2.5Y3/1(黒褐色)径0.7mmを1%含む 2層2.5Y4/4(オリーブ褐色)ローム粒子を30%含む 3層2.5Y5/6(黄褐色)径5cmのロームブロックを30%含む	強 中 強	中 強 強	
4	椭円形	台形	332 92 48	1層7.5YR5/8(明褐色)径1cmの礫を3%含む 2層7.5YR6/8(橙色)ローム粒子を20%含む 3層7.5YR3/2(黒褐色)径1cmの礫を3%ローム粒子を10%含む 4層7.5YR3/2(黒褐色)径1cm以下の礫を3%、ローム粒子を2%含む 5層7.5YR4/4(褐色)径1cm以下の礫を3%、ローム粒子を10%含む 6層10YR4/4(褐色)径0.2~2cmの礫を10%、ローム粒子を20%含む	強 強 強	中 中 強	
5	円形	半円形	125 102 32	1層7.5YR3/4(暗褐色)ローム粒子を30%含む	中	中	
6	椭円形	半円形	140 90 54	1層10YR4/6(褐色)ロームブロックを2%含む 2層10YR3/3(暗褐色)ロームブロックを5%含む	強 強	中 中	
7	椭円形(?)	台形(?)	(180) — (28)	1層10YR2/3(黒褐色)ローム粒子を10%、炭化物、土器片を1%含む 2層10YR3/4(暗褐色)	強 強	中 中	
8	不整形(?)	二段構造(?)	(284) — (34)	1層10YR2/3(黒褐色)ローム粒子を10%、炭化物、土器片を1%含む	強	中	
9	円形(?)	不整形(?)	(186) — (38)	1層10YR2/3(黒褐色)ローム粒子を10%、炭化物、土器片を1%含む 2層10YR3/2(黒褐色)ローム粒子を10%含む 3層10YR4/4(褐色)ローム粒子を10%含む。 4層10YR4/4(褐色)ローム粒子を30%含む	中 中 中 中	中 中 中 中	
10	不整橢円形	二段構造(?)	— (56) (32)	1層10YR3/2(黒褐色)擾乱ローム粒子を20%含む 2層10YR2/3(黒褐色)	弱	中	

番号	平面形	断面形	規模	覆 土	締まり	粘性	備考
11	不整形	二段構造	(114) 92 30	1層10YR4/4(褐色) ローム粒子を3%含む 2層10Y4/6(褐色) ローム粒子を20%含む	強 中	中 中	
12	楕円形	三角形	68 52 36	1層10YR2/3(黒褐色) ローム粒子を10%、炭化物、土器片を1%含む	中	中	
13	楕円形	半円形	98 — 22	1層10YR2/3(黒褐色) ローム粒子を10%、炭化物、土器片を1%含む	中	中	
14	楕円形(?)	三角形	— 14 43	1層10YR2/3(黒褐色) ローム粒子を10%、炭化物、土器片を1%含む	中	中	
15	円形	二段構造	78 64 24	1層10YR2/3(黒褐色) 2層10YR4/4(褐色)	強 中	中 中	
16	円形(?)	二段構造	(68) (42) (16)	1層10YR2/3(黒褐色) ローム粒子を10%、炭化物、土器片を1%含む	中	中	

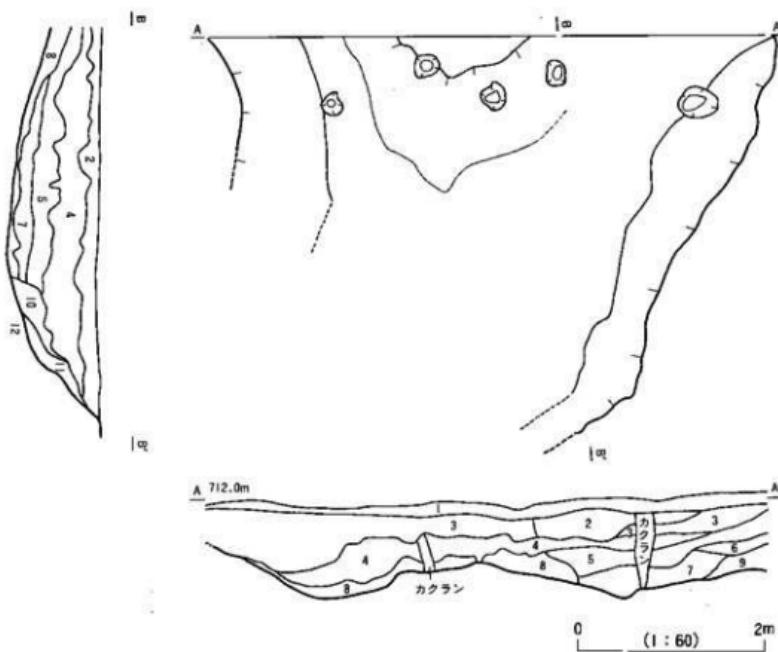
第4節 壇穴状遺構

1号壇穴状遺構

遺構(第34図)F-2グリッドに位置し、トレンチによる遺構の確認作業によって検出した。6.0m幅で4.5mの長さまで検出ましたが、攪乱によりプラン形状ははっきりせず、底面まで緩やかに傾斜する。深さは60cmから1m余りで一定せず、プラン形状と同様に、不整形ながら皿状に掘り込まれ、底面にはマウンド状の高まりがある。

覆土は11分層できたが、他の遺構と比較し不規則な堆積状況を示し、全体的に粒状の小礫を主体に含み、ローム粒子をまばらに含んでいた。覆土中からは、少量ではあったが織文土器片や黒曜石が出土した。

遺構の全体像が不明なため、本址は壇穴状遺構として捉えた。



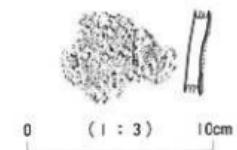
- 1層： 土手及び田の耕土
 2層： 5 YR 3 / 6 (暗赤褐色) 径0.5~3cmの小礫を3%含む。
 3層： 7.5YR 5 / 3 (暗褐色) 径1~3cmの小礫を3%含む。
 4層： 5 YR 3 / 1 (黒褐色) 径0.5~3cmの小礫を3%含む。
 5層： 10YR 3 / 3 (灰褐色) 径0.5~2cmの小礫を4%含む。
 6層： 7.5YR 3 / 4 (暗褐色) 径1~3cm小礫を5%含む。
 7層： 10YR 2 / 2 (黒褐色) 径0.5~3cmの小礫を3%含む。
 8層： 10YR 4 / 3 (にじい黄褐色) 径0.5~3cmの小礫を3%、ローム粒子を10%含む。
 9層： 7.5YR 3 / 3 (暗褐色) 径1~2cmの小礫を3%含む。
 10層： 7.5YR 4 / 6 (褐色) 径0.5~3cmの小礫を3%、ローム粒子を3%含む。
 11層： 7.5YR 3 / 4 (暗褐色) 径0.5~3cmの小礫を3%含む。
 12層： 10YR 4 / 3 (にじい黄褐色) 黒色土をまばらに含む。

第34図 I号竪穴状構造実測図

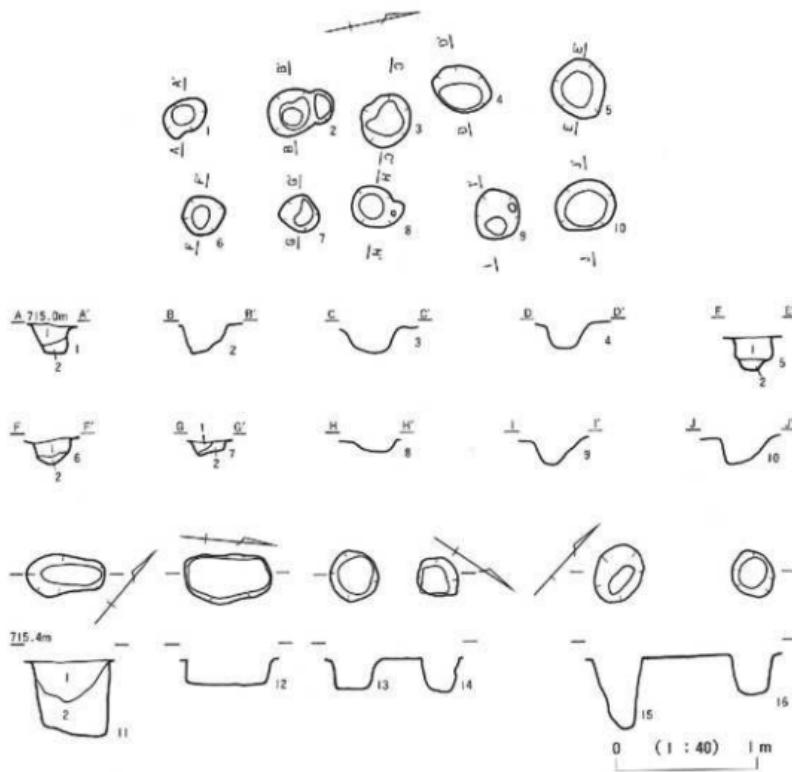
第5節 ピット

遺構（第35図）土坑以外の小穴で、時期及び性格の不明確なものをピットとして類別した。掘立柱建物址の一穴に属するものも含まれると思われるが、今回の調査結果からは詳細にその状況が捉えられなかった。

遺物（第36図）10号ピットより、縄文時代前中期の特徴を示す土器片が1点覆土中より出土している。



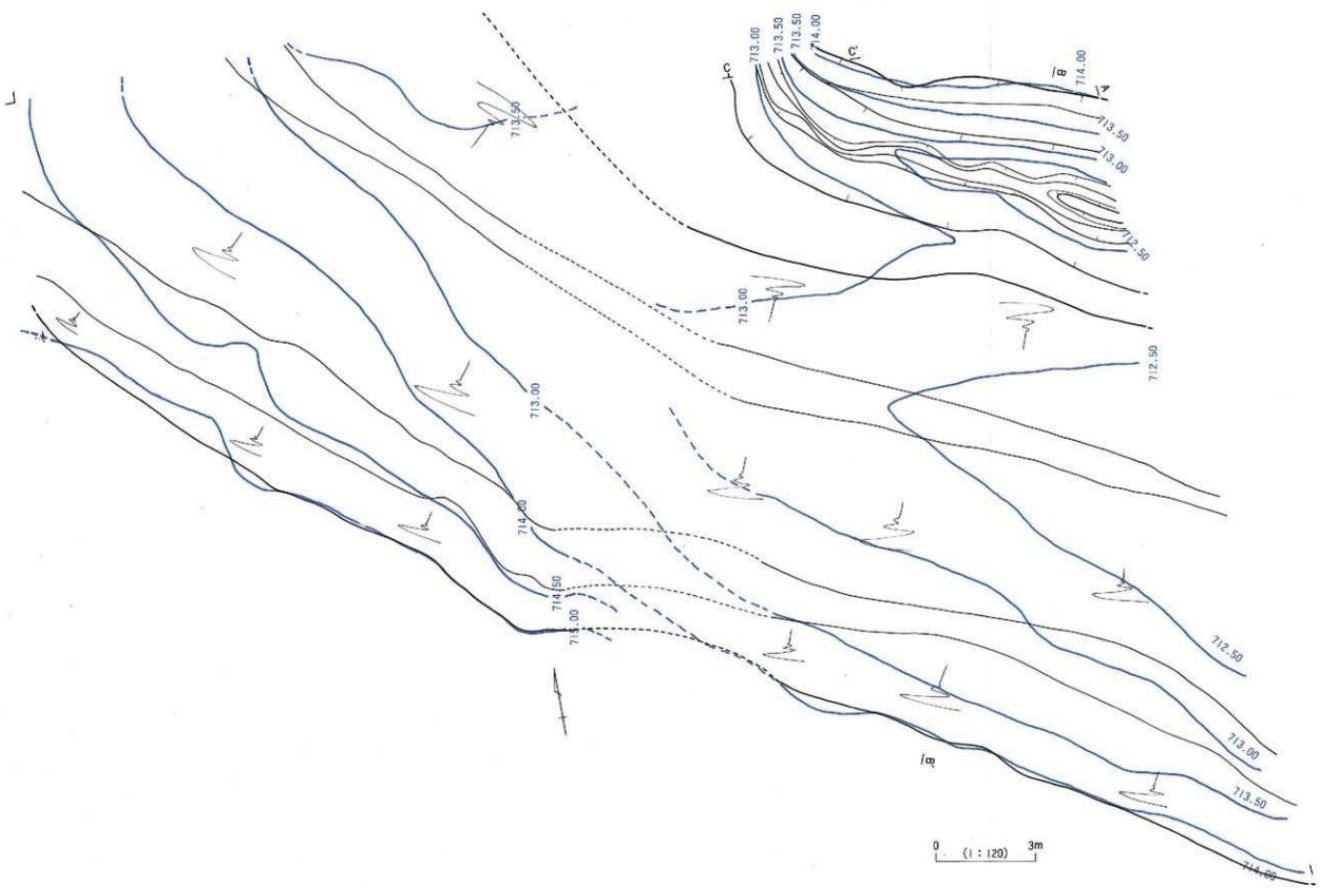
第35図 10号ピット出土土器拓影図



第36図 ピット実測図

第15表 ピット一覧表

番号	平面形	断面形	規模	覆 土	締まり	粘性	備考
1	橢円形	長方形	32	1層7.5YR2/1 (黒色) 7.5YR3/4(暗褐色)のローム 粒子を30%含む	強	中	
			22		弱	弱	
			22	2層7.5YR2/1 (黒色)			
2	不整橢 円形	二段構 造	46	1層7.5YR5/8 (明褐色) 径1cmの砾を3%含む	強	中	
			34				
			22				
3	円形	台形	40	1層10YR3/2 (暗褐色) 径0.3~0.5cmの砾を3%含 む	強	中	
			17				
			19				
4	橢円形	台形	42	1層10YR3/2 (暗褐色) 径0.3~0.5cmの砾を3%含 む	強	中	
			34				
			20				
5	円形	二段構 造	44	1層7.5YR2/1 (黒色) 7.5YR4/6(褐色)を50%含む	中	中	
			38	2層10YR5/8 (黄褐色)	弱	中	
			26				
6	円形	半円形	30	1層10YR2/1 (黒色)	弱	弱	
			28	2層10YR2/1 (黒色) 10YR5/6(黄褐色)を50%含む			
			22				
7	円形	台形	28	1層5YR2/1 (黒褐色)	中	強	
			22	2層5YR4/6 (赤褐色)			
			12				
8	橢円形	半円形	36	1層10YR5/6 (黄褐色)	強	強	
			30				
			9				
9	円形	半円形	36	1層10YR3/2 (黒褐色)	中	中	
			30				
			20				
10	橢円形	台形	44	1層10YR3/1 (黒褐色)	強	中	
			90				
			20				
11	橢円形	台形	56	1層7.5YR2/2 (黒褐色) ローム粒子をブロック状に 5%含む	強	中	
			26	2層10YR3/3 (暗褐色)	弱	中	
			52				
12	長方形	台形	62	1層7.5YR2/2 (黒褐色)	中	強	
			36				
			18				
13	円形	台形	36	1層7.5YR3/2 (黒褐色)	中	強	
			32				
			22				
14	不整形	長方形	34	1層7.5YR2/ (黒褐色)	中	中	
			26				
			25				
15	橢円形	三角形	40	1層7.5YR2/2 (黒褐色)	中	中	
			34				
			50				
16	円形	長方形	34	1層7.5YR2/ (黒褐色) 烧土粒子を1%含む	中	中	
			28				
			(16)				



第37図 溝状遺構測量図

第6節 溝状遺構

遺構（第37～39図）調査区の北西部A-2グリッドから東部のF-4グリッドにかけて、N-125°-E方向にほぼ地形の傾斜に沿う形で検出した。C-3グリッドより農業用水ないし排水路として、薬研状の谷地形を呈する、「洞」と呼ばれる自然の溝状遺構である（1号溝状遺構）。それより以西は西天竜の開田工事によるものと考えられる埋め立てがなされ、完全に埋没していた。堆積土は小礫を多量に含む褐色土で、縄文中期後葉土器片ほか黒曜石片・打製石斧や、鉄器（刀子）が出土するが、小量である（第40図）。

B-2、C-2グリッドでは、北西より3.6mの幅で1.5mの深さを測る2号溝状遺構が、それを切る状況で重複する。堆積物の主体は砾及び粗砂・細砂で、ほぼ短期間に流水によって運搬された堆積と考えられ、底面にはそれを示す侵食を受けた細い溝が何ヶ所か確認できた。また北側斜面には、人為的造作と考えられる約1m幅の段部が形成される。出土遺物はなかった。

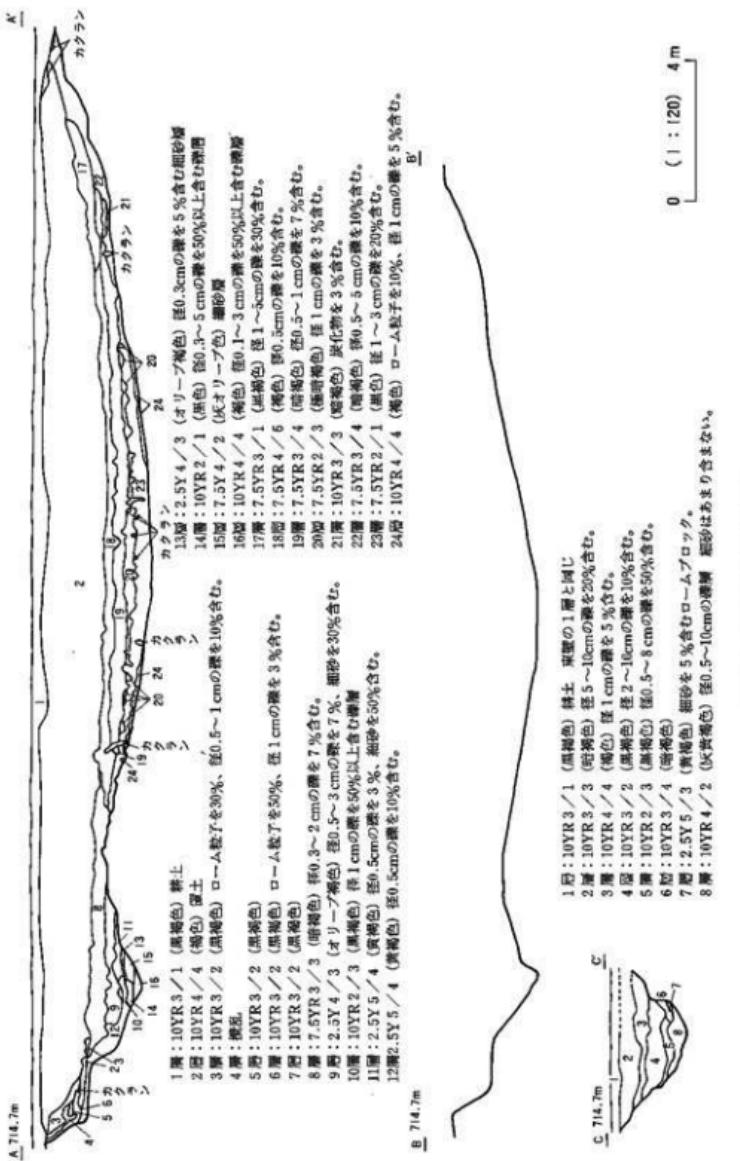
この谷は、開発以前を知る地域住民の話によると、「洞」と呼ばれる谷地形が、現町郷土博物館と箕輪中学校の間にみられる窪地までつながっており、現町役場の北部に位置する「白作洞」との間に、幾つかの堀切と考えられる溝があったと聞いている。それに当たるものが2号溝状遺構であるとするならば、本址は松島城址における自然の「洞」を利用した堀としての役割が想定できるが、何れにせよそれを裏付ける決定的な根拠は発見できなかった。



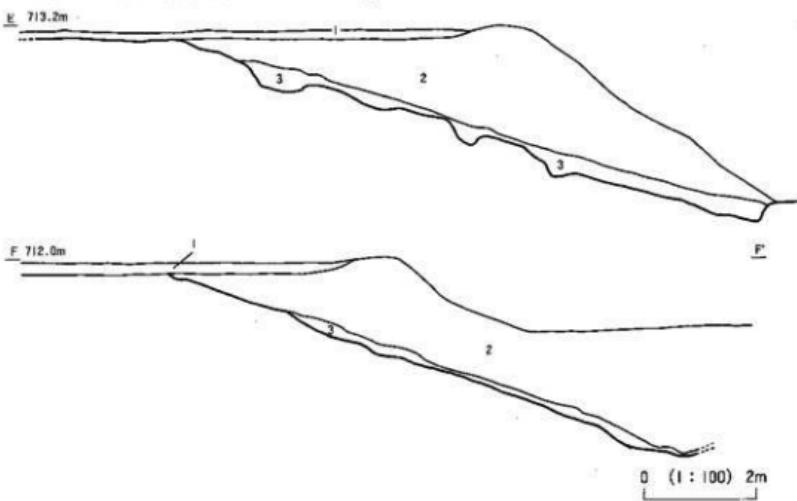
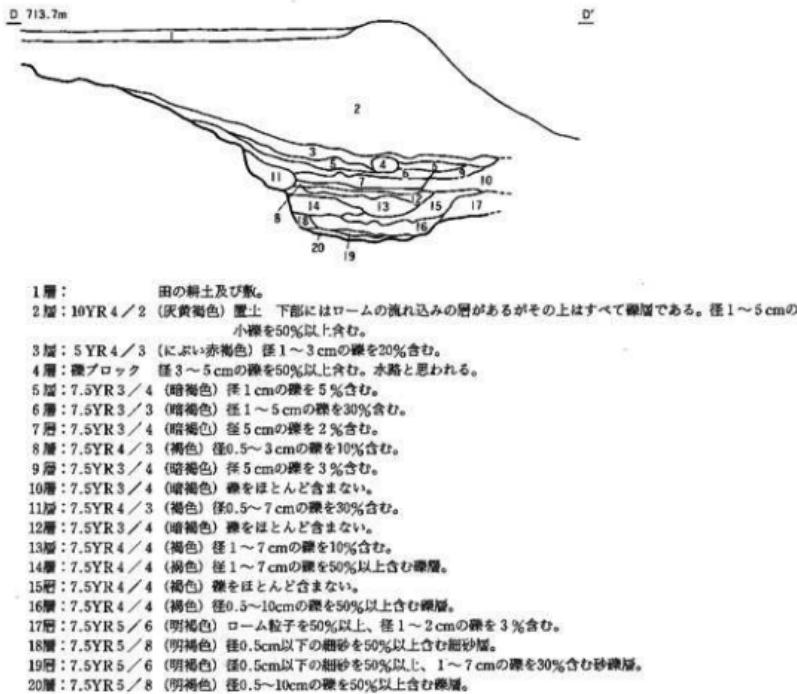
第38図 溝状遺構出土遺物実測図・拓影図

第16表溝状遺構出土鉄器一覧表

番号	器種名	法量	重さ	特徴	微
1	刀子	(5.4) 0.8 0.4	3.9	茎部のみ。	



第39図 滝大通耕土層断面図



第40図 溝状遺構土層断面図2

第7節 遺構外出土遺物

トレンチ掘削時、及び遺構上面確認調査時に出土した遺物を総括する。土器は、縄文土器（第42図）及び土師器・灰釉陶器（第41図）がみられる。

縄文土器は、地紋に単節縄文を施し、ソーメン状の粘土紐を貼り付け、その上から半截竹管状工具で細かな爪形文を施すもの（1・2、8・9）と、単節縄文のみを施すもの（4～7、11～13）、また無文のもの（10）など、前期末の特徴を有するものが主体で、中期中葉のもの（3）もみられた。

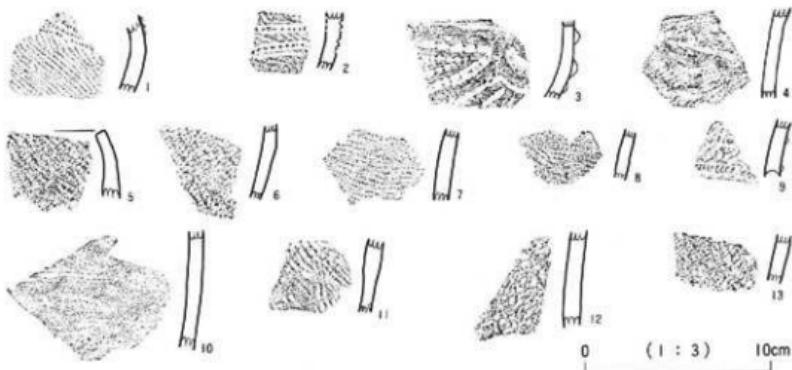
土師器は内面黒色処理を施す碗（1）が、灰釉陶器は同じく碗（2）が出土している。石器としては、打製石斧の他、黒曜石の薄片も出土している。



第41図 遺構外出土土器実測図

第17表 遺構外出土土器観察表

番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
1	碗	— 7.2 (1.7)		外面一ロクロナデ、底部回転糸切り 内面一ヘラミガキ、黒色処理	10YR7/4(にぶい黄橙)
2	碗	(13.3) (6.2) 4.1	体部は内湾気味に外反する。	外面一ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ 内面一ロクロナデ	内面自然釉付着 5Y6/1(灰)



第42図 遺構外出土土器拓影図

第V章 まとめ

本城遺跡における発掘調査は、町社会教育施設建設事業に先立つもので、7,000m²以上にも及ぶ用地全域を対象とし、工事の進行状況に並行して、足掛け4年に渡り実施してきた。遺跡地の中心部は、現在町役場庁舎が位置する河岸段丘の端部付近と推定される。そしてその敷地一帯は、室町時代末期から戦国時代にかけて古豪として活躍したとされる、松島氏の居城跡として広く知られている。城址並びにそれに関連する遺構のほとんどは、西天竜幹線水路の開設によって始まった開田事業時に、その大部分が失われたと考えられる。現在では、わずかながら町保健センター北側に、堀切と土塁の一部が残っており、松島城址の面影を今に伝えてい る。

今回行った調査箇所は、予測される遺跡包蔵地の西側限界部に位置することから、それを探る格好の機会であり、また城址に関わる何らかの手がかりを得ることも目的の一つであった。

成果としては、古墳時代後期末から平安時代前期にかけての集落域が、段丘の縁からおよそ300m西方にまで及んでおり、更にその以西にまで広がる様相が見受けられる。段丘上に連なる遺跡群のほとんどが水田地帯であり、また宅地化の進む格好な場所にあり、遺跡の限界域がまったくと言っていいほど判らないのが実状である。今回の調査によって得られた遺跡地の広がりが、必ずしも他にも同一視できるわけではないが、目安となる一例としての方向性を示すことは視野に入れておかなければならない。

本遺跡は、今まで既出した遺物から、縄文時代中期初頭・中葉を中心に、弥生時代後期・平安時代・中世の各時代が重複する複合遺跡として認識があった。しかし、松島城址に関連する直接的な遺構や遺物の検出には至らなかったものの、古墳時代及び奈良時代の遺構・遺物の発見は今回の調査で初めて判明したことであり、仲町遺跡や東町遺跡に代表される段丘下に広がる遺跡群との関連性をみることで、7世紀から9世紀におけるこの一帯の集落または村落形成の状況を探る大きな手がかりとなるであろう。

なお末筆にあたり、本事業に多大なご理解とご協力をいただいた、地元松島区の地域住民の皆様、そして直接調査にご尽力いただいた調査関係者皆様に、本書の刊行をもって改めてお礼を申し上げたい。

参考文献（著者名50音順）

- 笠沢 浩 1975 「長野県下出土の須恵器」信濃26-9・11
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1990 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4
-松本市内その1- 総論編
- 長野県教育委員会 1974 48『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』箕輪町
- 長野県教育委員会 1973 48『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』長野町
その2
- 長野県教育委員会 1983 長野県の中世城館跡-分布調査報告書-
- 長野県教育委員会 1990 『中央自動車道長野線埋蔵発掘調査報告書4』総論編
- 長野県考古学会 1987 「信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相」長野
県考古学会誌55.56
- 長野県史刊行会 1981 長野県史 考古資料編 全1巻(1) 遺跡地名表
- 長野県史刊行会 1985 長野県史 考古資料編 全1巻(2) 中・南信版
- 長野県史刊行会 1988 長野県史 考古資料編 全1巻(3) 遺構・遺物
- 箕輪町誌編纂刊行委員会 1976 箕輪町誌 第1巻 自然・現代編
- 箕輪町誌編纂刊行委員会 1986 箕輪町誌 第2巻 歴史編
- 箕輪町教育委員会 1985 『中山遺跡』
- 箕輪町教育委員会 1987 『中山遺跡(第2次)』
- 箕輪町教育委員会 1988 『中山遺跡(第3次)』
- 箕輪町教育委員会 1989 『堂地・中道遺跡』
- 箕輪町教育委員会 1990 『丸山遺跡』
- 箕輪町教育委員会 1996 『堂地・中道遺跡-第2次-』
- 箕輪町教育委員会 1996 『松島大原(遺跡)』
- 箕輪町教育委員会 1997 『大道上遺跡遺跡』

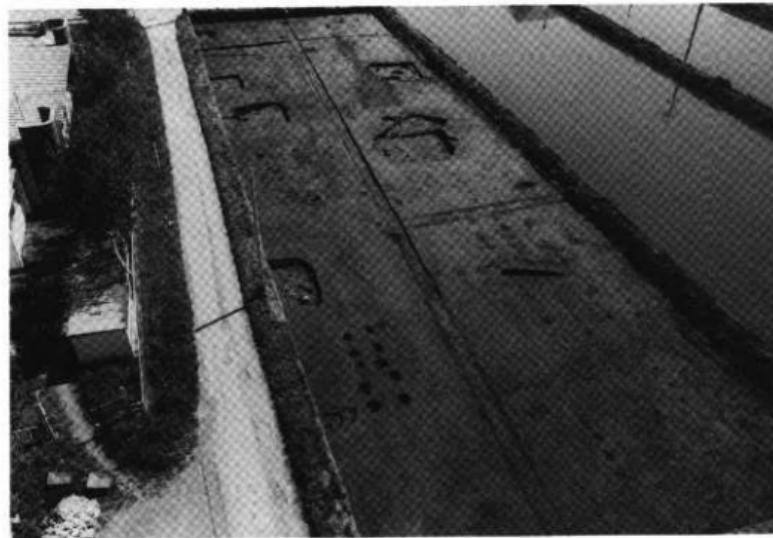
報告書抄録

ふりがな	ほんじょういせき						
書名	本城遺跡						
副書名	箕輪町社会施設（町文化センター）建設業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	赤松 茂・根橋とし子						
編集機関	箕輪町教育委員会						
所在地	長野県上伊那郡箕輪町10,291番地					TEL. 0265-79-3111㈹	
発行年月日	1997年3月30日						
所取遺跡	所在地	コード	北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
ほんじょう 本城	長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,276番地3他	67	35度54分39秒	137度58分59秒	19930401～ 19940120 19940401～ 19940620 19960401～ 19960531	7,058m ²	箕輪町社会教育施設（町文化センター）建設業者
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
本城	集落跡 溝 壴	绳文前期 绳文中期 古墳 奈良 平安 中世	竪穴式住居 土坑 ピット 竪穴状遺構 溝状遺構	11棟 15基 16基 1基 2条	繩文土器 土師器 須恵器 灰釉陶器 陶器 打製石斧 磨製石斧 石鏃 刀子		本遺跡は、中世末期に古豪である、松島氏の居城跡として知られている。遺跡地内には、昭和52年に指定された町史跡「松島氏の墓城」がある。

図 版



調査地全景（調査前東方より）



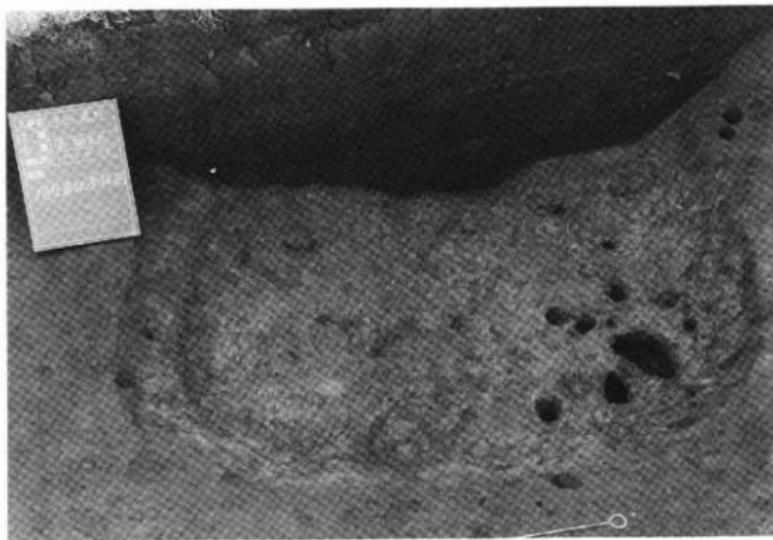
調査地近景Ⅰ（北東より）



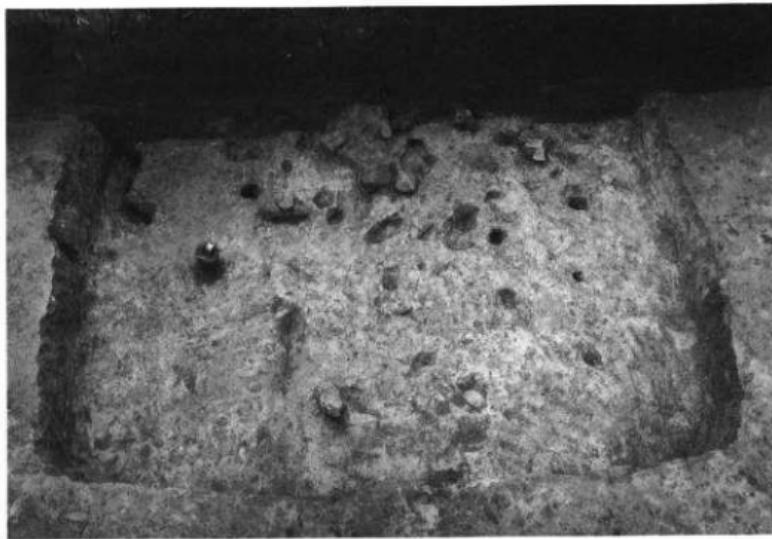
調査地近景 2 (西方より)



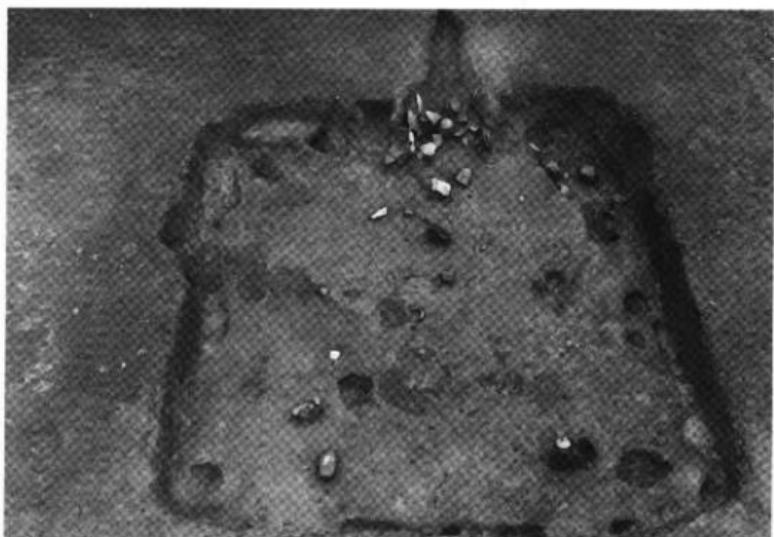
土層堆積状況



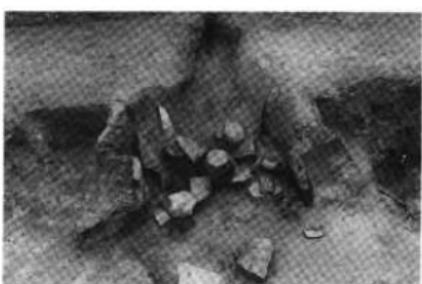
1号住居址



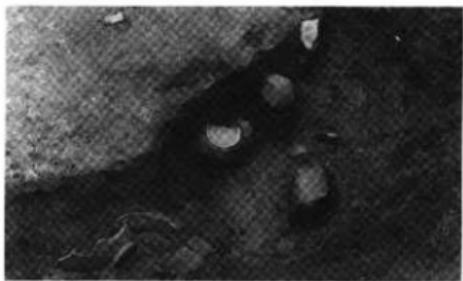
2号住居址



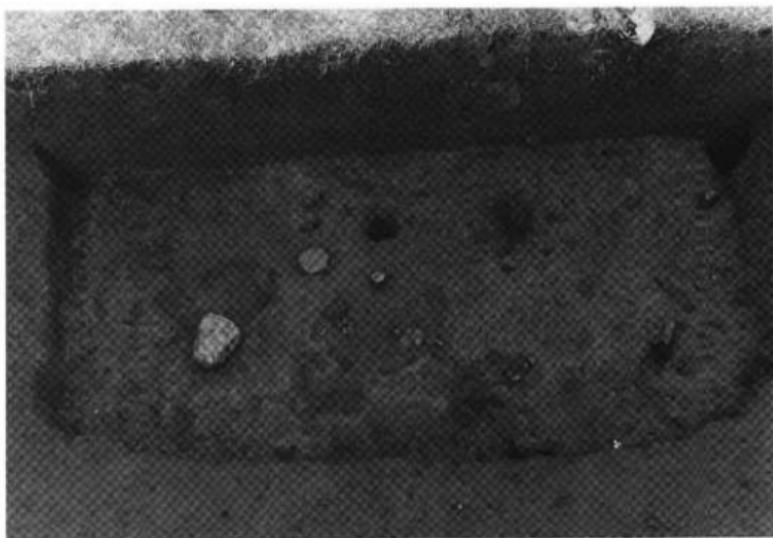
3号住居址



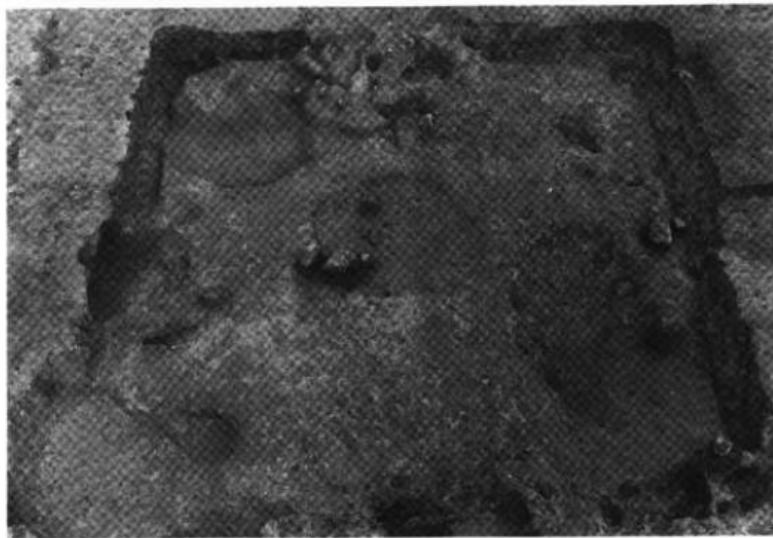
3号住居址カマド出土状況



3号住居址遺物出土状況



4號住居址

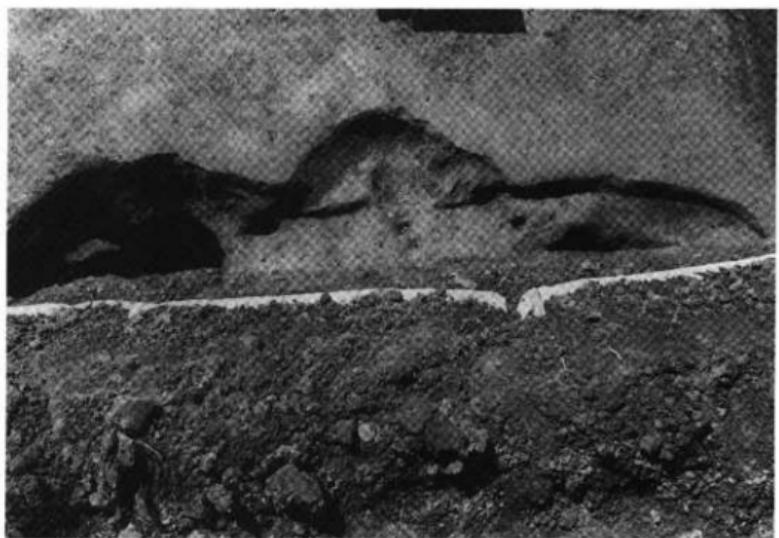


5號住居址

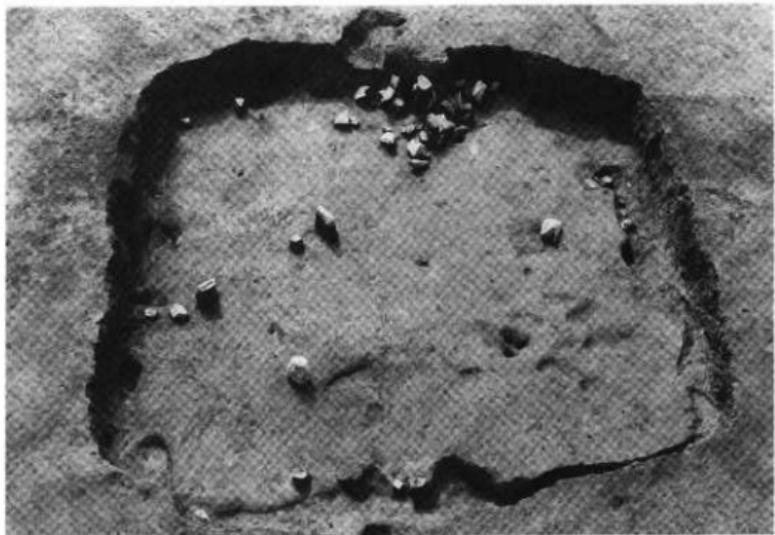
圖版
6



6号住居址 1



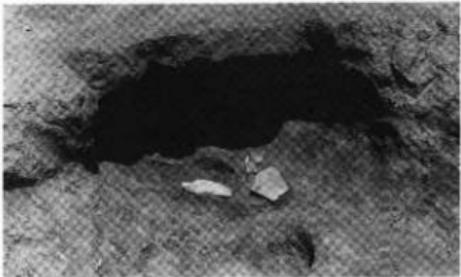
6号住居址 2



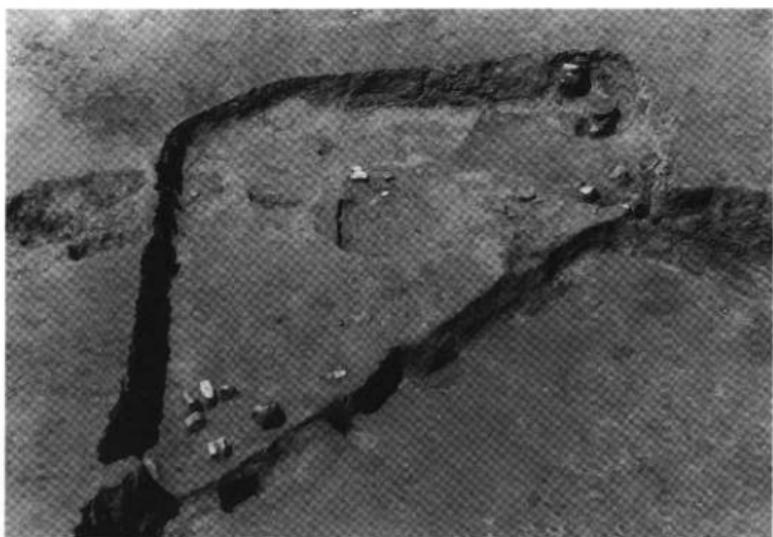
7号住居址



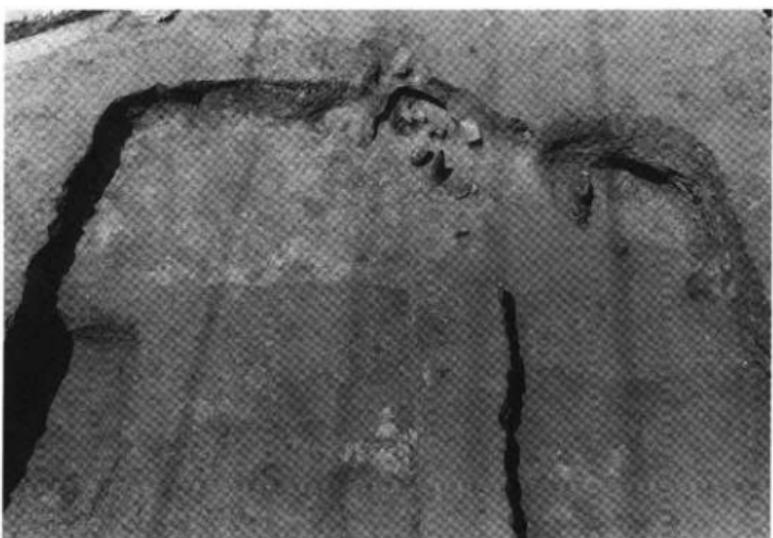
7号住居址カマド出土状况



7号住居址横穴出土状况



8号住居址



9号住居址



10号住居址

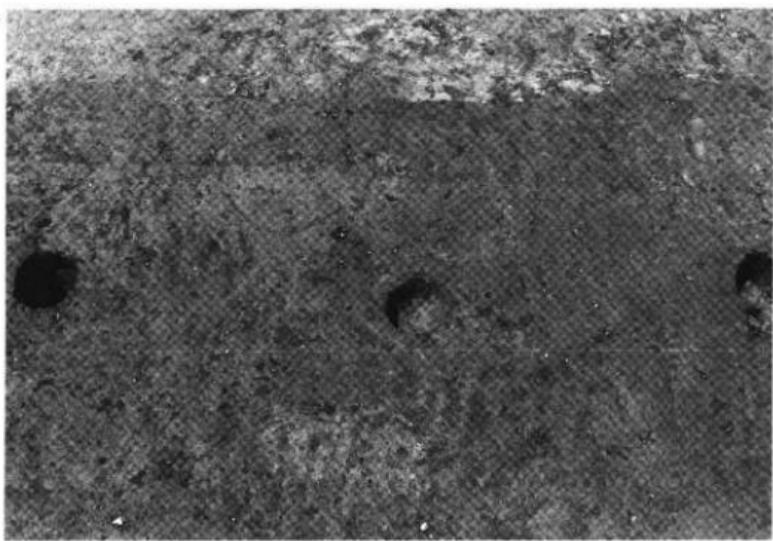


10号住居址カマド出土状況

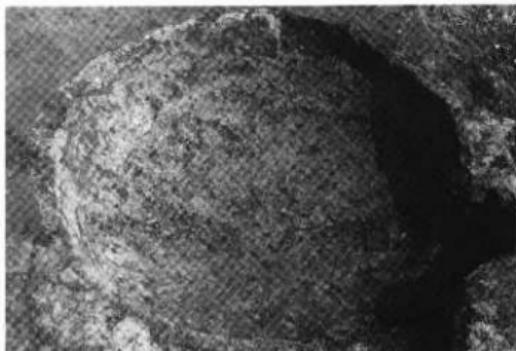
圖
版
10



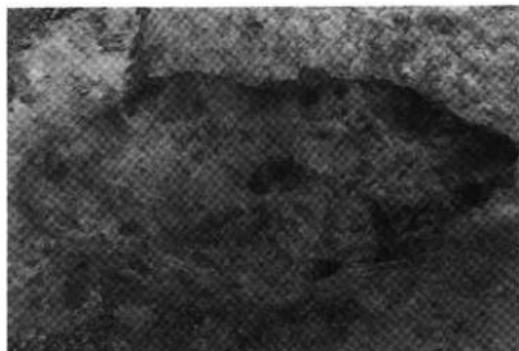
11号住居址



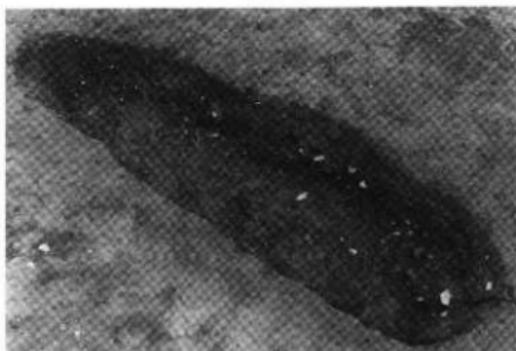
1号堆立柱建物址



1号土坑

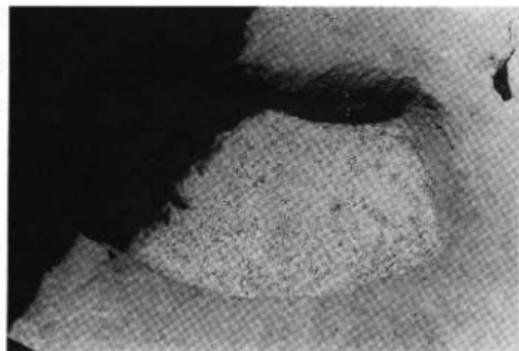


2号土坑



4号土坑

圖
版
12



7号土坑



8号土坑



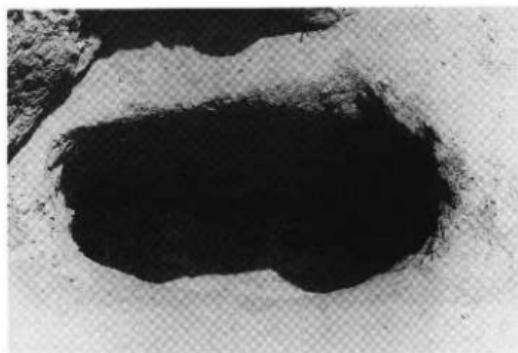
10号土坑



11号土坑



16号土坑

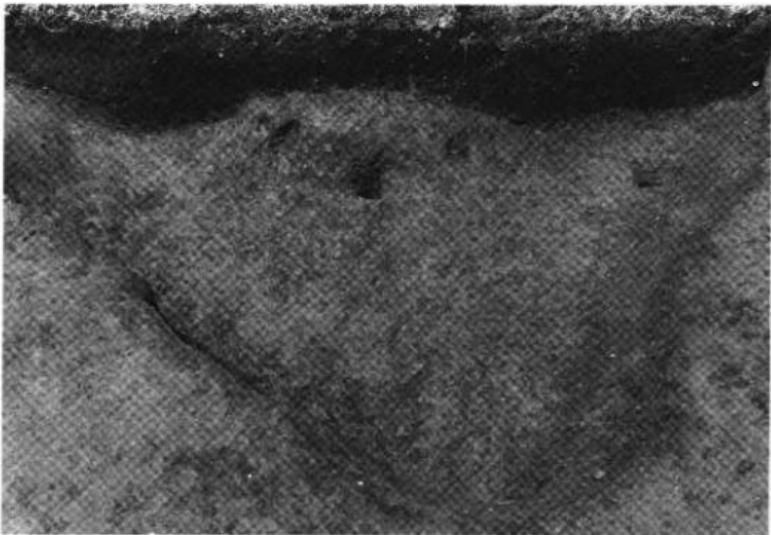


11号ピット

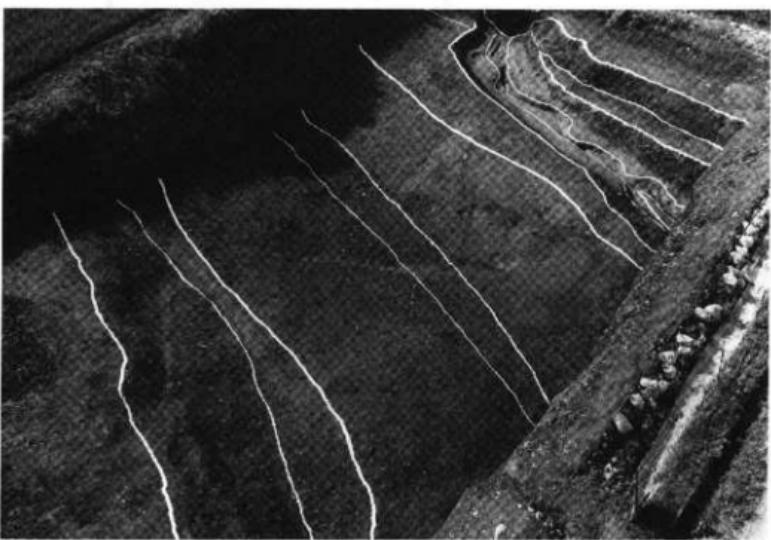
图

版

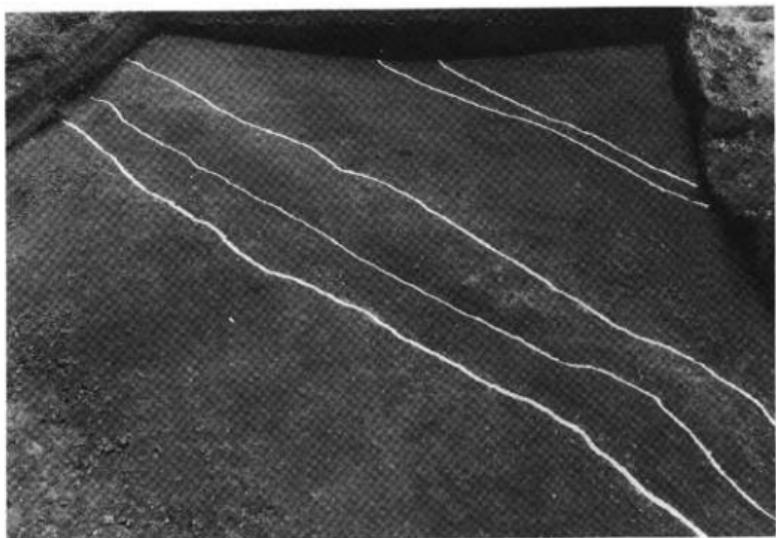
14



I号竖穴状遗構



I・2号溝状遺構



I号溝状遺構



I号溝状遺構土層堆積状況